－文 芸－

草の丘

第 14 号

2018 年 6 月 印旛文学の会

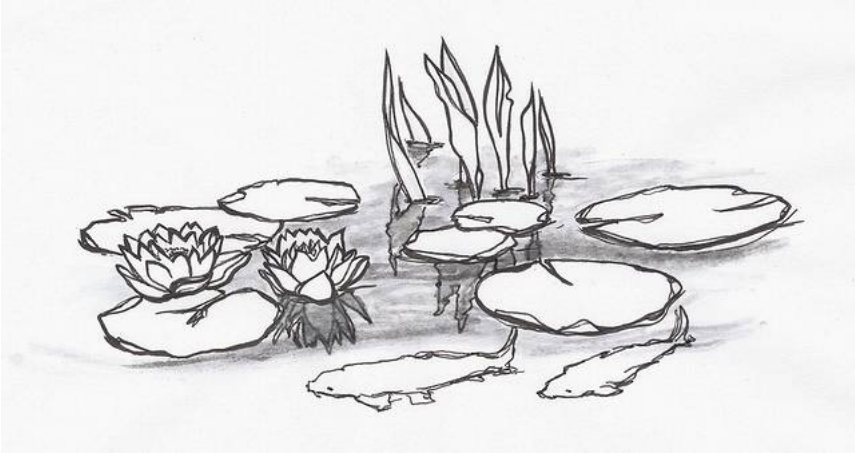
URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第十四号（二〇一八年 六月）

目次　草の丘 第十四号

《詩》
メントールな向かい風　中川とら……一
《短編》
反 論　畑中康郎……三
《紀行文》
廃村紀行（寒川）　唐瀬 光……二七
《連載小説》
そよのバアバの空中サロン（その五）　中川とら……四三
《書評》
小説「回転木馬」に見る友情と愛　畑中康郎……四八
《連載小説》
この前・この間（中編）　いんば華子……五三
宿場町と共に消ゆ（第三回）　香取 淳……六八
《カット》
高橋より



メントールな向かい風

中川とら

一、きょうがどんなに満足できても
あした　わたし達は冷たい風に向かって歩く
気持ちよい日だまりでうつらうつらしていた刹那に
思わぬ課題が立ちはだかる

二、きょうがどんなに笑えても
あした　わたし達は冷たい風に向かって走る
希望とゆううつのはざまを闘いながら
高笑いして過ごしたきょうは
疾走するように遠ざかる

三、きょうがどんなに順調でも
あした　わたし達は冷たい風に向かって生きる
耐えて　奮闘し勝ち得た興奮も
一瞬にしてさめていく

四、人生は容赦ない　それをとことん知った今、

かけめぐる血潮は　蘇芳色に沸騰した

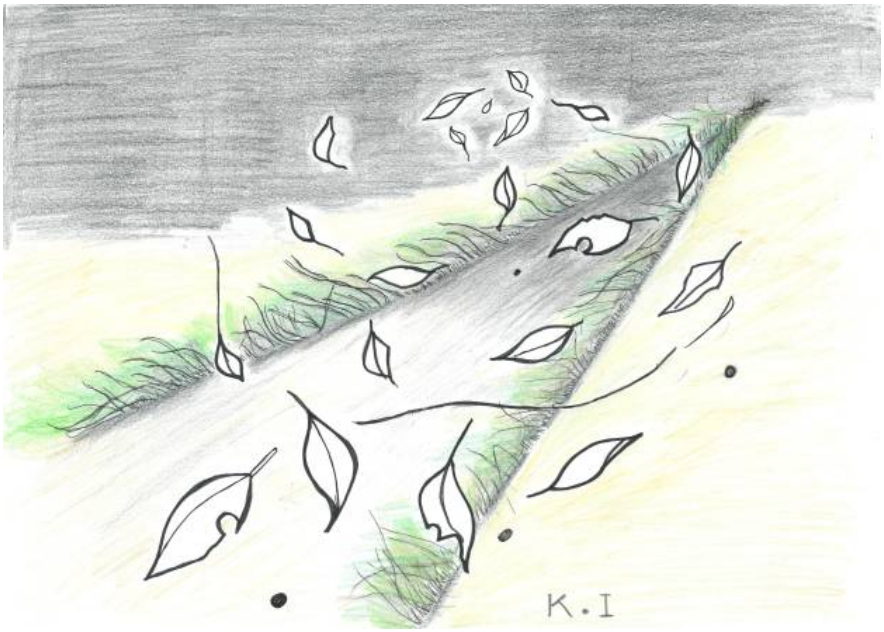
気道の奥まで刺すような向かい風は

もはや　どこまでも　清々しい

中途半端を許さない一筋の道

いよいよの覚悟で行く時が来たのだ

◇



反論

畑中康郎

世間は運の巡り合わせと理不尽で成り立っているものらしい。

会社組織を例にとれば、最悪は相性の悪い上司の下で働く場合だ。その場合、俗にいう昇進の見通しがなくなる。そのうえ貴重な時間そのものが毎日のつまらない葛藤とともに空しく失われていく。どちらかがその職場からいなくなるまでその状態は続く。

そんな三年間が篠田に存在した。三十年以上が経ったいまでも、篠田の内部でその事実は未解決のままになっている。そのときどのように対処すべきだったのか、未だに分かっていない。

篠田と確執のあったのは坂下という課長である。四十代半ばにして本社の課長に昇進した。無名の学校の出身だったから、まず異例の出世といっていい。本人はそれが自慢だった。確かにやり手だったかもしれない。仮にそれが正しいとしても彼を課長に推挙してくれる人がいなければならない。

推挙したのは大林部長だった。当然、坂下は大林に深く感謝していたし、無類の忠節を誓っていた。足を嘗めろと

言われれば平気で嘗めるくらいの卑屈さである。当然、会社のトップを務める社長にはとても頭が上がらない。

ところが、部下に対してはまったくの別人に変身した。人格を持った人間として部下を見ないのだ。とにかくわがままで一日中怒鳴り散らしている。怒鳴ることが部下への指導だと思っているから始末に負えない。そうすることで課長としての権威を保てると思っていたようだ。怒り方も部下の成長を考えたものではなかった。自分の感情を外に吐き散らしていただけだ。その理由として考えられることは、彼が部長や役員クラスの前でまったく意見がいえないことが挙げられるだろう。その悔しさが根にあって、部下に接したからに違いなかった。

早春の新芽が吹き出そうとしていたある日のことだった。外は柔らかな日差しが降り注ぐ絶好の散歩日和だ。そんなときに威張る坂下のいる会社になんかに行きたくなかった。ゆったりのんびり好きなことをして過ごしたいのだが、そうはいかないのが宮仕えの辛いところだ。生活のためには働かなければならない。

その日、篠田は出勤すると、またしてもすぐ坂下に呼びつけられた。坂下にとって、篠田はさながら年来の敵らしい。

「篠田、何度言ったらわかるんだ。お前は馬鹿か。文書というものはな、簡潔に書くんだよ。五W一Hをしっかりと守ってな。微塵も自分の意思を入れてはダメなんだ。お前、小説を書いているんじゃないんだよ。わかっているのか？」

篠田はいつものように真剣に聞いていなかった。耳にタコが出来るくらい、いつもいわれていることだったからだ。彼は坂下の考えに納得していなかった。文書に意思を籠めるから上申に意味があるのではないか。おそらく、淡々と必要事項だけを書けばいいと坂下は考えているのだろうが、上申をするだけの理由があるから上申するのだ。現状を何らかの形で変更し改善したいから上申するのだ。そこには当然、理由がある。それを書いて何が悪い？

なおも坂下は、執拗に何かいっている。ヒステリックにも見える。篠田は途中から上の空になった。突然、きのうパチンコで打ち止めにできなかった悔しさが蘇った。チューリップが大きく開いたとき、肝心のパチンコ玉が切れた。チューリップは三十秒間、開きっぱなしのはずだった。彼はあわてて、玉貸し機に千円札を入れた。しかし時遅しで、

新しい玉を手にしたときにはチューリップは無念にも萎んでしまった。
「おい！　篠田！　お前、俺の話聞いているのか」
篠田ははっとした。
「聞いていますよ」
「じゃ、いま俺がいったこと復唱してみろ！」
「だから、文書に自分の意思を入れるなってことでしょう」
「そうじゃないよ。その次にいったことだ」
「……」
「ほれ見ろ。やっぱり聞いていない。大体お前は普段から不真面目なんだよ。お前からは、やる気というものがまったく感じられん」
「やる気はありますよ」
「いや、ない。お前なんか会社の役に立っていると到底思えない。会社辞めるか？　その方がお前のためにも会社のためにもなる」
如何にも吐き出すようなその口調に、篠田の怒りは沸騰した。いっていいことと悪いことがある。それを課の全員の前で口にするとは、いくら平社員でも一分の魂くらいはある。
『フン、お前なんかに俺をクビにできるか！』と心の中で呟いた。

その日の午後のことであった。篠田は再び坂下に呼びつけられた。また説教が始まるようだ。
「お前にたっぷりといい聞かせたいことがある。おい、この資料を見ろ。これはな、今年度の社長方針だ。勿論読んでいるな」
篠田は読んでいた。が、殆ど忘れていた。大した内容ではなかったことだけは記憶している。それをその場で、改めて読まされるのだ。
それは、毎年の年頭に社長談話として述べたものを冊子にして配布されたものだった。年頭の挨拶として、現在の経済情勢やそれに対応する会社として取るべき姿勢がお決まりの文章となって並んでいた。ところが、篠田からみて気になる表現が一箇所、中段あたりにあった。
『勿論わが社は生活産業ですから、お客様第一です。お客様がわが社の商品を受容れてくれなければ、会社としては成り立ちません。それは当然なのですが、ここでよく考えてください。そうはいっても利益が上がらなければ、会社

としての存続が出来ないのです。みなさんは、どうしたら利益が上がるのか、一人ひとりがよく考え、自分の問題として日々の仕事に取り組んでいただきたい』

これが納得できなかったのである。社長の考えは、自社の利益をお客様サービスより優先することだといっている。

ところが、最も大切なことは、お客様の立場に立ったサービスである。お客様は納得すれば商品を買って下さる。その結果、会社の利益は伸びる。だが、お客様は敏感である。もしも会社の利益貢献に自分が利用されていると誤解すれば、すぐ逃げてしまう。だからこの考え方は、篠田にいわせれば間違いなのである。

「読んだか？　改めてどう思う？　お前が会社に必要な人間かどうか、俺が判定してやる」

そこまでいわれて、篠田はまたしても頭に血が上った。そこで反発してしまった。

「課長ねぇ。課長は社長の考えがすべて正しいと思っているんですか？　少なくとも私にいわせてもらえば一ケ所間違っていますよ」

「何だと？　平社員の分際で社長のおっしゃることを批判するつもりか？」

「平社員が意見をいったらいけないんですか？」

「お前なんかに何がわかる。それじゃどこが気に入らないのか、いってみろ！」

語気が荒い。そこで、篠田は自分の考えを述べた。

「何を偉そうにいうか！　お前なんかに何がわかる？　社長が正しいんだよ。お前、社長の方針に納得がいかないならますますもってこの会社には要らない人間だな」

坂下のこの言葉に、篠田は完全にキレた。彼はいい古された言葉を引用して反論した。

「課長は、社長のいうことはすべて正しいとおっしゃる。じゃ、社長が死ねといったら、課長は死ぬんですか？」

「馬鹿野郎！　お前という奴は本当にどうしようもない、性根の腐った奴だ」

篠田はここが正念場だと考えた。だから、目を坂下から外さなかった。坂下もしばらくは篠田から目を外さなかったが、ついに坂下の方が根負けした。席に戻れと目配せした。

篠田が席に帰ってくると、隣の席に座っている同僚の渡辺が小声でいった。

「おい、はらはらしたよ。あいつ、滅茶苦茶な奴だから、

本気でお前をどうにかする気だったぞ」
「そうかな。やばかったか？」
「はいはいといって、いい加減なところで妥協しろよ。どうせ、あいつ単純だから。いうことを聞けばすぐ機嫌がよくなるさ」
「わかっているんだけど、奴の前に出るとつい何かいいたくなってしまうんだよなぁ」
「俺もたまにこの野郎と思うときがあるが、しがない宮仕えだ。我慢しているよ」
二人はそのまま静かになり、仕事に戻った。
それから二時間くらいが経ったころだった。また、あの嫌な坂下の声が事務室に響いた。
「宮田、どうしてお前はそんなに気の利かない女なんだ。お客様が来られたら、俺がいう前にお茶くらい出せ。俺の教育がなっていないという悪い評判が立つじゃないか。お茶出しは昔から女の仕事と決まっているんだよ。わかっているのか！」
坂下は、直前まで脇の丸テーブルで取引先の課長と話をしていたが、そのお客様が帰るとすぐ声を上げたのだ。
怒鳴られた宮田が坂下の席まで来て、しきりに頭をペコペコ下げている。
「課長、ごめんなさい。私、別のことを考えていてついお客様がお見えになっていることに気づきませんでした」
「大体だな、お前さんはふだんから、ボーッとして機転が利かない女なんだよ。誰かからいわれるまでもなく、気を利かすんだよ。大体、お前さんはだな…」
そこまで坂下が文句をいったとき、篠田が大声を出した。
「課長、内線電話があって、部長がすぐ部屋まで来て欲しいそうです。何でも急用だとか」
坂下はビックリした。これまで部長から直々部屋まで来いといわれたことは殆ど記憶にない。顔が一瞬にして引き締まり紅潮した。
「何！　部長から？　そうか、それじゃ仕方ない。宮田、説教はまた別の機会にする。篠田、すぐ行くと伝えてくれ」
「課長、もう電話は切れました。部長はだいぶ、お急ぎのようです」
篠田がそういうと、坂下は慌てふためいてノートとペンを持ち、急いで事務室を出て行った。
渡辺が怪訝な顔で篠田に訊いた。
「おい、電話なんかかかって来なかったけど、あんなこと

いっていいのか？」
「ああ、構わないさ。あいつ、部長に叱られるだろう。ざまを見ろってところだ」
渡辺は笑っていた。あきれたという顔だった。このやり取りを聞いていた課の他のメンバーもニヤニヤ笑っている。

営業部長室を訪れた坂下は、前室に座っている女性秘書に取り次ぎを頼んだ。
「江藤さん、部長からすぐ来いと呼ばれたんだが、部長室に入っていいかな？」
彼女は首を傾げた。
「えっ、そうなんですか？　じゃ部長が直々お電話されたんだわ。こんなこと、普段はありませんけど。でも、いま労務部長がお入りです。部長は同席をお求めなのかしら？」
「そうなんでしょ。きっと、労務と営業に共通する問題でも起きたと思いますね」
そういってから坂下は考えてみた。果たして、そんな問題あったかな？　何も思い浮かばない。しかし課長クラスには知らされない重大な問題が急に起きたのかもしれない。それを直々部長から相談されるということだろう。自分も大したものだ、と誇らしげに思った。
江藤が部長室をノックして、部屋に入った。
ノックの音を聞いた二人の部長は、密談中の視線をテーブル上の資料からドアの傍らに立つ江藤の方に移した。
「江藤君、今大切な用件の最中だ。誰も入ってはならないといったはずだが」
営業部長の大林の口調は、いつもよりややきつい。
「それが…。部長からすぐ来るようにいわれた、とおっしゃって坂下課長がお見えなんです」
「えっ、何？　坂下が？　私は彼を呼んでいないが…。この用件に課長の出る幕はない。何かの勘違いだろう。すぐ自分の席に戻るようにいってくれ」
大林がそういうと、江藤は顔をさっと赤らめた。
「もっ、申し訳ございません。すぐ申し伝えます」
深々と頭を下げた彼女は、部屋を出てドアを閉めるなり坂下にいった。
「坂下課長、困りますわ。部長はお怒りです。私、部屋には誰も入れないように部長からいわれておりましたの。それに、課長をお呼びになってはいないとのことでしたわ」
坂下は、これ以上ないほどに顔を赤くした。そして急に

元気を失くした。大失態かもしれなかった。部長から減点されたかもしれない。
次の瞬間、篠田の仕業と思った。怒りは篠田に向いた。
『あの野郎、俺に恥をかかせやがった』
どうすれば、篠田をやり込めることが可能か、頭の中はそれだけでいっぱいになった。
営業企画課の事務室に帰るなり、大きな声を上げた。
「篠田！　篠田！　ちょっと来い！」
だが、篠田の返事はなかった。姿がないのだ。
渡辺が涼しい顔でいった。
「課長、篠田ですが、急用が出来て少し前に外出しました」
坂下の顔が怒りで蒼ざめた。怒りの矛先を失い、激しく歯軋りをした。
大林部長の呼び出し事件以来、坂下の篠田に対する恨みはさらに大きくなった。篠田は自分にとって、もはやガンだった。どうやったら、この病巣を取り除くことができるか、そればかりを考えるようになった。考えた挙句、篠田を地方支店に飛ばして出世のチャンスを失わせること、あるいは仕事を完全に取り上げ、やる気を奪って自発的に辞めさせることが最大の報復だと気づいた。
実行に当たって、しばらく考えあぐねたが、営業部の最終人事権を持つ大林部長に相談するのがやはりベストだと思い至った。多忙なスケジュールの中、十五分だけ時間をもらった。
「部長、お忙しいところ申し訳ございません。きょうは折り入ってご相談したいことがあってまかり越しました」
坂下は部屋の入り口で立ったまま丁重にいった。
「何だ。用があるなら、こっちに来てすぐ話してくれ」
大林は、坂下があまり好きではなかった。必要以上のおもねりを感じるからだ。
「すみません。早速いいます。実は人事のことです」
「人事？　いまはその季節じゃないだろ。誰のことだ」
「実は、入社五年目の篠田のことです」
「篠田？　彼をどうするんだ？」
「彼を営業部から外し、福岡支店にでも出したいと思っているんですが。丁度空がひとつ出たそうなので」
「役職はつけるのか？　例えば係長とか」
「とんでもございません。社員のままで行ってもらおうと思っています」

「それじゃ、まるで懲罰人事じゃないか。彼が何か、失態でも演じたのか？　私はね、彼はいいと思っている。なかなか優秀だ。はっきり意見はいうし、その申し分にも筋が通っている。何が問題なんだ？」
「いえ、それは部長の買いかぶりというものです。奴はわがままで気が強くて、頑固者です。第一、社長のご意見にも異論を唱えるような人間なのです」
「ふーん。例えば？」
「社長の利益重視の考え方に対し、会社の利益よりもお客様サービスを優先させるという考え方なのです。部長はおかしいと思いませんか？」
　大林は笑い出した。
「君、篠田君の考え方に間違いはないよ。売り上げの源泉はお客様なんだよ。お客様にそっぽを向かれたら利益も何もないじゃないか」
「ですが、部長。社長は会社の利益をまず考えることこそ、会社を生かすことになるとおっしゃっています。私は社長のおっしゃることが正しいと思います。社長が間違えるはずがありません」
「どこで社長がそうおっしゃったのかすぐには思い出せないが、ともかく君は社長のいうことなら何でも正しいと思う口だな。社長だって、間違えることはあるよ。君は内容よりも誰がいっているかで事の善悪を決めるタイプらしいな」
「いえ、とんでもありません。私はそんなタイプではありません」
「じゃ、どんなタイプだ？」
「いえ、そ、その、きょうは篠田の人事のことで……」
　坂下は内心冷や汗が出た。
「もういい、この話はやめだ。篠田君はそのままでよろしい。彼の話は二度とするな！」
　大林は怒ってしまった。坂下はうなだれて、すごすごと部長室を出た。坂下は思った。
『こうなったら、篠田の仕事を減らす。徐々に減らして最後は何も仕事をさせない。そうすれば奴は自発的に会社を辞めるだろう。それしかない』
　そこで坂下は篠田の仕事のすべてを洗ってみた。
　まずひとつには、本社が全国支店の週売上高を支店から報告させ、それを集計している。それを前の週の実績と比較し、どの製品の売り上げが増加しまた減少しているかを

分析する。売上高が前週比プラスマイナス一〇％を上回る場合は、ヒアリングしてその理由を聞く。
この仕事を篠田から取り上げることだ、と坂下は考えた。
翌日、別室に呼んだ。そしてこういった。
「君な、いまやってる仕事がいくつかあるだろ。そのうちの支店実績の毎週集計、その仕事を君の二年後輩の赤坂君に任せたいのだが、君、了承してくれるな？」
篠田は怪訝な顔をした。その理由がわからない。
「すると課長は、私のやり方が手ぬるいとでもおっしゃるんですか？」
「いや、そういうわけではない。赤坂をそろそろ育てたい。君もいつまでも同じ仕事じゃ、飽きるだろ？」
「わかりました。それじゃ、私に別の仕事をください。いまでさえ、自分には楽過ぎる仕事と思っています。物足らないんです」
坂下は眉を顰めた。
「いや、いいんだ。君はゆったりと構えてもらえばいい。赤坂君の指導でもしてくれないか」
篠田は、その瞬間、坂下の真意に気づいた。
『こいつ、俺から仕事を奪って、やる気を失わせ、ついには会社を辞める気にさせるつもりだ。それなら、それで俺にも考えがある』
納得したようにいった。
「課長、わかりました。赤坂に譲ります」
「おっ、そうか。わかってくれたか」
坂下は安心したように別室を出て行った。

しばらく時間が経った。週間の集計作業がなくなったため、篠田は時間に大きな余裕ができた。週の集計がなくなれば、月の集計もなくなる。一ヶ月単位の実績を分析し、経済情勢まで踏み込んで月報を作り上げる。これがかなりの手間だった。さらにその説明は課長のみならず部長に対しても行なわなければならない。
部長説明は本来、課長の仕事なのだが、細かいところが面倒に思った坂下が篠田の仕事にしてしまった。いまでは彼の仕事の柱になっている。その仕事を失ったから、手持ち無沙汰の状態になった。
その代わり、当然、入社三年目の赤坂の負担が大きくなった。時々、篠田に泣きついてくる。篠田は赤坂の大変さはわかっていた。しかしこの事実を赤坂の不満にまで高め

るためにあえて肝心なところは放置した。ただ、しばらくすれば元の状態に戻るとだけ伝えた。
赤坂はそれでなくても他に仕事を多く抱え、精神的にも物量的にも手一杯になった。夜は遅くまで残業するようになった。そして結局、仕事に追い込まれ深刻な状態になった。赤坂には悪いと思ったが、その状態になってはじめて、篠田は組合に話を持っていった。

組合幹部には、篠田と入社同期の太田がいた。組合における役職は労働部長である。
篠田は、午後の早い時間、組合事務室で仕事をしている太田を訪ねた。太田が事務机から顔を上げて笑顔でいった。
「おう、なんだ。珍しいな。雑談でもしに来たのか？」
相変わらず快活な男だ。
「雑談なら、いいんだがな。実はそうじゃないんだ。俺と二年後輩の赤坂の件で相談にやってきた」
故意に深刻そうな様子で篠田が答えた。
「ふーん。いいよ、いってくれ。なるべく難しい問題がいいな」
「相変わらず、頼もしいことをいってくれるなぁ」

篠田は太田の男気が好きだった。
篠田は、自分と坂下課長のこれまでの確執と今回仕事を奪われたこと、代わりに赤坂が苦しんでいることなどを詳しく説明した。
太田の顔は真っ赤になった。こうした嫌がらせに近いもの、あるいは役職上位者による強権発動と思われるものに対しては非常に敏感な男だった。
「よーし、わかった。その坂下という奴、許せない。俺に任せろ。コテンパンにやっつけてやる」
篠田は逆に心配になった。太田は怒り出すと手がつけられない。問題を大きくして坂下が会社を辞める事態にもなりかねない。
「でもなぁ、太田。坂下がおかしくなるようなところまで責めなくていいよ。彼にだって家庭がある。いい加減なところで収めてくれよな」
「あぁ、わかってるよ」
と太田は答えたが、本当に手加減するかどうかはわからなかった。

数日後、組合の労働部長名で会社側の大林営業部長あて

に労使交渉の申し入れがなされた。
勿論、営業部長は団体交渉にこれまで何度も出席している。しかし今回は営業部長だけと交渉機会を持ちたいという。大林には心当たりがなかったが、交渉には数時間程度必要という要求にも快諾した。大林は組合に理解のある人だった。実際、若いころは組合の執行委員も務めたことがある。
大林は交渉を前にして、申し入れの理由を調べてみた。すると驚くべきことがわかった。営業企画課長の坂下が部下二人に職権を利用して強権発動行為を行い、ひとりの社員に過大な労働負荷を与えていた。
そして、もうひとりの社員というのが篠田であった。仕事を取り上げられたという。そういえば、しばらく前に坂下が篠田を九州に飛ばしたいといっていた。大林は事情を詳細に調査する必要を感じた。篠田を部長室に呼び入れ、直接、事情を訊くことにした。
篠田の内線電話が鳴った。
「篠田さん？　江藤です。坂下課長に聞かれるとまずいので、返答はご無用です。大林部長が直接篠田さんから組合の申し入れ事項のことでお聞きになりたいとのことです。課長に気づかれないように、そっと、部長室までおいでください」
篠田は多少緊張した。自分の答え方によっては坂下が危なくなる。自分は坂下が会社を辞めることになることまでは望まない。ならば、自分にも非があったと認めるような発言をするのか？
だがそれもできない。何も悪いところなどないからだ。
篠田が営業部長室に入ると、すぐ大林が篠田に訊いた。
「篠田君、君が組合に訴え出たらしいね。組合を使うとは、よほど追い詰められていたということかな？」
篠田が神妙に応える。
「部長にはご迷惑をおかけします。ですが、追い詰められたという訳ではありません」
「だが、年齢も離れていて、役職も上の者から命令されると理不尽な命令であっても従わなければならないし、ふつうは追い詰められるものだよ」
「そうなんですが、ふだんから気持ちを強く持とうと思っていますので、私は大丈夫です。本来は、私が直接、坂下課長に申し上げる方法もあったのですが、課長は私のような者がいっても、命令を引っ込めるような人ではありませ

ん。この方法しかありませんでした。まさか、私が部長に直訴することもできませんし……」
「わかった。私から坂下課長にいっておこう。確かに、君が私に直訴する形では、坂下の立場もなくなるだろうな」
「ありがとうございます。そこで、私からお願いがあります。坂下課長については、これが解決したなら一切不問にしていただきたいのです」
「ほう、君は結構度量が大きいね。坂下が聞いたらどう思うかな」
「いえ、部長。私が不問をお願いしたことは内密にしてください。課長との関係がふやけたものになってしまいますので」
「君もなかなかの人物だな。わかったよ。組合には、私が坂下に善処を命じたことで解決したといっておこう」
　篠田は、大林に深々と頭を下げ、部長室を出た。この大林という人物は、篠田から見れば雲の上の人で、個人的なことで直接会話ができるような立場ではない。それなのに気軽に口を利いてくれるし、少しも大物ぶらない。篠田はいっぺんに好きになった。

　労使の交渉はすぐに終わった。組合の主張が通り、篠田も赤坂も元の状態に戻った。
　太田から篠田に電話がかかってきた。なるべく早く組合事務室に来て欲しいとのことだった。
　篠田は組合事務室に入るとすぐ礼をいった。
「太田、お礼をいうよ。すんなり要望が通った。いまは俺も赤坂も元の仕事に戻った。赤坂なんか、俺が組合に働きかけたことをどこからか聞いて、俺に涙ぐんで礼をいっていた。本当はもっと早く動けばよかったかもしれないが、赤坂が少しも困っていないなら提訴も不要だ。彼の苦境を実際に確かめないとまずいと思ってな」
「うん、それでいいんじゃないか。ところで、肝心の坂下の処分だが、あれは職権乱用だし、職位上位者による強権発動だよ。立派に懲戒処分の対象だ。それをお前は不問にしてくれと、大林さんにいったらしいな？」
「そうなんだ。俺は仕事が元に戻ればそれでいいと思っている。あの坂下にしても懲戒処分になったら、後の出世にも関わるし、あれでいいよ」
「お前って、人情家だな。俺だったら絶対に許さない。職権乱用なんてとんでもない行為だよ。でもまぁ、いいさ。

組合に提訴した人間がいいっていうんだから。組合としても不問にするよ」
　篠田はほっとした思いで組合事務室を出た。
　ところが、収まらないのが坂下だった。組合に提訴した人物が篠田とわかっているから、はらわたが煮えくり返った。ことあるごとに、なお一層辛く当たるようになった。篠田の仕事にいちいち難くせをつけてくるのだ。
　あるとき、篠田の一週間の支店売上高集計が遅れたことがあった。毎週の水曜日には、前週の分を部長に報告しなければならないのだが、そのときは月曜日になってもまとまらなかった。火曜日の午前中は、篠田が分析のために時間を使うことになっており、その後で坂下が報告を受ける。大林から質問が出たときに、坂下が答えられないようでは課長失格だからだ。火曜日の午後になっても篠田が分析している様子がなかった。坂下はイライラし始めた。
「おいっ！　篠田！　まだか？　部長から俺に質問が出たらどうするんだよ。俺が恥掻くじゃないか。俺の立場を少しは考えろ」
「課長、無理いわないでくださいよ。ある支店からの報告が遅れているんです。すでに十の支店の分析は終わっています。ただそこが来ないと集計もできませんし。でも、いいですよ。課長への説明が間に合わなかったら、私が課長の代わりにすべて答えますから」
「そういうことじゃないんだよ。わからない奴だな。俺の立場というものがあるんだよ」
「あ、そうですか。それじゃ、今度の報告の際は急用ができたということで、課長は席を外してください」
「お前は、どうしようもない馬鹿だな。俺が同席することに意味があるんだよ。部長説明は本来俺の仕事なんだ」
「じゃ、これから課長ひとりで部長室に入ってください。今後は私、部長室に入りませんから」
「馬鹿言え、支店報告なんて俺がやらなくてもいい。俺にはもっと大きな会社全体に関わる仕事がある」
「へぇ、すると課長は支店の販売実績を重視していないんですね？　部長はなんておっしゃるか見ものですね」
「おいっ！　いい加減にしろ！　俺は支店を軽視しているわけじゃないんだ。部長に余計なことをいったら承知せんぞ」
「とにかく今回の報告は私ひとりで大丈夫ですから」
「だめだ。俺が部長室に入らないわけにいかない。いいか

ら、ノーガキのヒマがあったらさっさと仕事しろ」
それからの篠田は報告の遅れている支店にハッパを掛けながら、なんとか火曜日の夕方には集計をまとめた。それから分析を行い、課長への説明はその夜の十時近くになった。
その分析であるが、一点だけ、坂下の納得できない箇所があった。それは中国支店における家具等の耐久消費財の売り上げが極端に落ちたところだ。前週比二〇パーセントの落ち込みなのだ。
篠田は、落ち込みの原因を当該地域で上場企業A社が倒産した影響だと分析した。その地方の経済は、確かにA社が大きく影響している。A社によって成り立っている側面があるといってもいい。しかし坂下は思った。
『だからといって、当社が扱う家具等の売り上げにそれほどの影響があるとも思えない』
「篠田、いくらなんでもこの分析は無理があるんじゃないか」
「いえ、無理でもないと思うんですよ。経済なんてムードですよ。上場企業も倒産するわけだからこれからもっと地方は不景気になるという一般庶民の気分の落ち込みが影響したと思うんです。それで買い控えが起きたと考えられませんか？　耐久消費財はとくにそうだと思います」
すると、たちまち坂下は納得したような顔になった。
「そういうこともあるかな？　わかったよ。時間もないから、もういいや。これで部長に説明しよう」
二人は翌日、この分析資料を部長室に持参した。
篠田が全般の説明をいつも通りに行ない、問題なく終わるかに見えた。
ところが、案の定、中国地方の実績とその分析の部分に部長の目が止った。
「坂下君、中国支店だが、この分析で君は妥当と見たのか？」
何事にも部長から指摘を受けると過剰に反応する坂下は、途端に篠田の方を向き、こういい放った。
「見ろ、篠田！　だからこの分析は無理があるとあれだけいったんだ。俺のいうことをまったく聞かないからこういうことになるんだよ」
篠田は唖然とした。確か、坂下課長は説明に納得したはずだ。言い争うのは醜態だったが、自分が一方的に悪者になるのも納得が行かない。
「課長、昨日は私の説明に納得されたはずですが」

「馬鹿いえ、俺は納得していなかったんだ。それをお前が無理やり説明を打ち切ったんだ」
「何をおっしゃるんですか！　それはひどいですよ」
「馬鹿をいうな！　ひどいのはお前の方だ」
いい争っている二人を見て、大林は苦い顔をした。
「もういい。少なくとも坂下君が最終的に納得したからこそ、私への説明という段取りになったんだろう？　それをいまさら、見苦しいぞ。言い訳は通用しない。君の責任だ。説明はよくわかった。篠田君はもういいよ。坂下君は残ってくれ」
大林は、篠田を部長室から出るよう促した。坂下は部長室に残らされ、こってりと大林から絞られた。課長の責任を果していないというのである。
メンツ丸つぶれになった坂下はますます篠田を目の仇にするようになった。
一方の篠田も、坂下をますます信用しなくなった。坂下の命令に少しでも理不尽な点があれば、いままでより徹底して反論するようになったのである。犬猿の仲はさらに深まった。課全体の雰囲気がさらに悪化した。小川が篠田の直接の係長だったが、二人の間に立っていつもおろおろしていた。
「篠田君、頼むよ。もっと課長と仲良くしてくれないかな。他の社員の手前もあるし、課の雰囲気も悪くなるし。だから、もっと課長を立ててくれないか」
「課長を立てるというのはどういう意味ですか？　係長は、雰囲気を守るためには、課長の暴言にも目を瞑れというんですか」
「いや、そういうことではないんだが」
「じゃ、どういうことですか？」
篠田がそういうと小川は黙った。いつものことなのだ。小川という人は、根っからの善人だった。
一方、坂下はこう思った。
『こいつを何とか理由をつけてどうしても遠ざけたい。しかしなまじっかの理由ではダメだ。篠田は仕事が出来るから失態を演じるとは考えられない』
じっくり考えて、思いついたことが登山であった。
『自分は登山のベテランだ。それに引き替え、篠田は登山の経験は皆無だ。奴を登山に誘い、再起不能なまでの怪我に追い込む。いっそ殺すか？　だが問題は、頑固者の奴が俺のいうことを聞いて素直に登山に参加するかどうかだ。

だが、篠田は渡辺と仲がいいから渡辺を誘ったらどうだろう？　渡辺は俺の命令なら何でも聞く。それとついでに宮田も誘ったらどうだろう？　宮田も俺のいうことはよく聞く。若い女性が来るとなったら、少しは違う。そうだ、一番肝心なのは、ハイキングに少し毛の生えた程度の山を選ぶことだ』

結局、坂下が選んだ山がＹ岳だった。

『登山道は、一部にきついところもあるが、大体楽なハイキング程度の山だ。しかし一歩ルートを外せば、危ない場所もある。危ないところで仕掛ける。渡辺と宮田をそのときは口実を作って遠ざける。我ながらいいアイデアだよ』

坂下はほくそ笑み、短絡的なアイデアに酔った。それだけ坂下は深刻で、追い詰められた状態だった。

篠田が坂下から登山の誘いを受けたのは、炎暑が遠のき、爽やかな初秋の微風が吹き始めた九月半ばのことであった。篠田は仕事中、坂下の席まで来るよう命じられた。

「篠田、十月の第二週の日曜日なんだけどな。Ｙ岳にハイキングしようと思っている。君も参加して欲しいと思ってな」

「えー！　なんでまた、私なんかと？　第一、私、登山苦手なんですよ。あまり好きでもありません。しかも私と課長の二人だけでは抵抗がありますよ。課長だって、私のこと嫌いでしょ」

「お前もまた、はっきりとモノをいう奴だな。そういいにくいことをズバズバいうものじゃないよ。それに、今回の登山はハイキング程度だ。低い山だし、素人向きだ。すでに渡辺君と宮田さんには声を掛けて、了承を得ている」

「それにしても突然ですね。私、登山の経験がないんですよ」

「登山というほどの大げさなものではない。さっきいったようにハイキングだ」

「でも、なんで私なんですか？　課には他にいくらでも課長とハイキングしたい人間はいますよ」

「いいんだ。これまで君と私はうまくいっていない。ハイキングしながら、これからのことも話したいし、いい気分転換になると思うんだ」

篠田は瞬時に判断した。

『こいつ、俺を登山で苦しめ、快感を得ようとしている。それとも、何か悪だくみをしているに違いない』

そこでこういった。
「課長、申し訳ないのですが、私、その日、用事があって行けません」
すると、坂下が怒った。
「いいから来い！　全部の用事をキャンセルして来い。これはな、業務命令だ」
「業務命令とはおかしいですよ。日曜日はプライベートな時間ですよ。なんで課長の命令に従わなければならないのですか？　すみません。私行きたくありません」
「またいうことを聞かないな。いいから来い！　仲直りのきっかけにしたいといってるだろ」
と、意外なことを口にした。
「仲直りなんですか？　ふーん……」
篠田の口調がトーンダウンし、そのまま黙ってしまった。
「よしっ、それでいい。計画は十月八日だ」
席に戻った篠田は、渡辺に訊いた。
「渡辺も行くんだって？　課長はどういう風の吹き回しなんだろう？　よくわからない。課長の気紛れにも困ったもんだよ。ところで渡辺さ、Y岳に登山するらしいんだが、Y岳というのは火山なんだろ？　危なくないのかい？　渡辺は登山が好きだからよくわかるだろ」
「あぁ、火山っていったって爆発した記憶なんてないし、簡単な山だよ。初心者でも登る山だからそれほど気にすることもないと思うよ」
渡辺はあっさりしていた。簡単にそういうと、自分の仕事に戻ってしまった。
『しかし、登山をあまりに軽く考えてはいないか？』
心配になった篠田は、Y岳について、気象庁に問い合わせてみた。担当者がいうには、
「最近、火山性微動が約一ヶ月続いていますので、登山は気をつけてください。なお、噴火警戒レベルは当方の発表では、一の平常となっています」
ということだった。そうか、平常なのか、じゃ大丈夫だな。行ってみるか。同行して登山でも負けないところを課長の奴に見せつけてやろう、と篠田は思った。
念のため、登山ガイドで噴火警戒レベルについても調べた。
『レベルは五段階に分かれており、最高レベル、つまり危険度ナンバーワンは五の「避難」であり、四はやや下がって「避難準備」、三「入山規制」、二「火口周辺規制」、そし

て、一「平常」となっている』
ただし、「平常」については付記があった。
『平常であっても一般的な平常とは異なります。火山としての平常であって、火口付近はいつ噴火が起こるか予断を許しません』
そのあたりが誤解を招くところなのだ。
篠田は、素人の悲しさでY岳を安全と考えてしまった。

十月八日の当日、四人は難所の少ないY岳を順調に登っていた。昼前には頂上付近に来た。
篠田以外の三人は結構登山を楽しんでいる。未経験者は篠田だけだったが、もともと体力があるのか、まったくへばっている様子はない。元気そのものだった。
坂下は、こう考えていた。
――頂上で昼食を取った後、午後下山するときに何かロ実を作り、篠田を二人から離す。登山ルートを外れた場所にさりげなく誘う。うまい具合に奴が足を踏み外して崖から落ちればそれがベストだ。俺は管理不注意といった程度で収まるだろう。
坂下がいった。
「さぁ、もう少しだ。あと少しで頂上だ。着いたら、昼食だ。篠田、楽なもんだろ？」
篠田が少し息を切らせながら応えた。
「そうですね。思ったほどにはしんどくないですね。登山が楽しくなりそうですよ」
宮田がその言葉を拾った。
「篠田さん、意外と登山の素質があるんじゃない？　頼もしいわ」
渡辺が宮田の言葉を引き取った。
「宮田さん、その判断はまだ早いよ。こいつ、これからへばると思う」
四人は声を立てて笑った。健康な人間の屈託のない笑いだった。
そのときだった。突然、渡辺が前方を指差した。
「おいっ、見ろ！」
見ると、火口付近から急に噴煙がモクモクと上がり始めた。
坂下が大きな声を上げた。
「おいおいおいおい。ちょっと、まずいぞ。爆発か」
次の瞬間、すぐ目の前にこぶし大の石が飛んできた。バ

ラバラっと音を立ててさらに大きな石も降ってくる。
「危ない！　岩陰に隠れろ」
渡辺が叫んだ。今度はもっと大きな噴石だった。
「あっ！　いててて」
叫んだのは坂下だった。その左足の脛あたりを見ると、こぶし大の噴石が当たったらしくズボンが破れ、血が流れている。
篠田は、急激に命の危険を感じた。噴石は物凄い勢いで降り注いでいる。坂下は痛みのためか、動けない。他の二人はいまのところ無事のようだ。
篠田は叫んだ。
「渡辺、宮田さんをガードしてあの山小屋に避難してくれ」
彼らの右前方二十メートルくらいに、幸いなことに山小屋が見えた。
「キャー！　恐い、もうだめだわ」
宮田はすぐ目の前を飛んで行った、比較的大きな噴石に腰が抜けたように座り込んでいる。
「大丈夫だ。頭を下げて、腕で頭を隠して、山小屋に向かって走るんだ。走れ！」
渡辺が宮田をせかした。渡辺と宮田は懸命に山小屋めざして走り始めた。その間にも容赦なく噴石が降り注いでいる。
坂下は動けなかった。左足を骨折したのか、痛みからなのか言葉が出ない。
「課長、前の方に岩の突起があるでしょう。そこまで行きましょう」
幸いなことに彼らの左前方数メートルのところに小さくオーバーハングしている場所があった。
篠田はそう叫んだが、坂下の方はすでにパニックになっている。
「ダメだ。一メートルだって動けない」
顔からは冷や汗が流れている。
「動くんですよ。痛くても動かなかったら間違いなく死にますよ。すぐにもっと大きな噴石が飛んでくるに違いないんだ」
「篠田、助けてくれ。俺はまだ死にたくない。家族だっているんだ」
「わかってますよ。引っ張りますから手をよこして」
篠田は、坂下の左手を掴んで斜面を引きずった。そのときだった。小さかったが、噴石が篠田の肩を直撃した。痛

みが襲ってきた。歯を食いしばった。ここであきらめたら、もう死ぬしかない。とにかく課長を引っ張って、自分もあの岩陰に行く。そうすれば助かるかもしれない。最後まで諦めてはいけないんだ。

「しのだぁ、助けてくれ。死にたくない」

そのとき、渡辺と宮田が山小屋に辿り着くのを見えた。

よしっ、あとは自分たちだけのことを考えればいい。多数の小さな噴石がまたバラバラと降ってきた。それがまた当たった。ひとつは篠田の背中に、もうひとつは坂下の右胸を直撃した。篠田の背中はリュックがガードしてくれた。少し痛みが加わったが大したことはない。坂下は蹲っている。果たしてまだ生きているのかわからない。とにかく、あと二メートルだ。岩陰に入れば助かるに違いないんだ。

後でわかったことだが、噴石は初速で時速三百キロに及んだ。ビュンビュンと音を立てて、頭上わずかなところを掠めた。さながら、それは地獄であった。生きているのが不思議なくらいである。

「うっ」。小さな噴石が今度は篠田の右足を直撃した。

それでも篠田は最後の力を振り絞り、坂下を引きずってなんとか岩陰に避難した。どこからそんな力が出たのか不思議だった。

噴石は終息する気配がなかったが、とりあえず命の危険はなくなった。だが、その位置は迂闊にも、オーバーハングした岩を飛び超え、角度によって坂下の右足を直撃する可能性があった。

そのときだった。坂下が絶叫した。

「ぎゃあああ！」

噴石が坂下の仰向けになった右足の膝蓋骨を直撃したのだ。それまでの二個の噴石よりやや大きかった。そして坂下はあまりの痛みにとうとう気を失ってしまった。

篠田は叫んだ。

「課長！　大丈夫ですか！」

坂下の体を揺すってみた。反応はあり、目をうっすらと開けた。胸と両足にかなりの怪我をしているが、命には別条がないようだ。

あたりは噴煙で真っ暗になった。視界がまったくきかない。腕時計を見たが、衝撃で止っている。その間にも、火山灰が急激に降り積もってきた。一面灰色の景色なのである。最前まで真っ青だった美しい空は、噴煙で隠されてしまった。

ドスン、ドスンと音を立てて、ますます噴石は降り注いでいる。中には軽トラックほどの巨大な石も飛んできた。あんな岩に直撃されたら即死だ。

日曜日の秋の快晴、多くの登山客がいた。その人たちはどうしているだろう？　篠田は周囲を見回したが、暗くて何も見えない。それまでは叫び声がいくつも聞こえていた。

火口付近はさながら地獄であった。降り積もる火山灰が歩行を不可能にした。それでなくても足に怪我をしていたから避難は難しかった。

こうなったら、救助を待つしかない。だが、救助もこの灰と噴石ではすぐには難しい。

篠田は覚悟した。噴石が収まり、危険が去った後でなければ救助は難しい。さすれば、今夜はこのまま負傷の激痛に耐えて過ごすしかない。

坂下は意外に気の弱い人間であった。それがよくわかった。痛みが多少和らぎ意識が戻ると、泣き言をいい始めた。

「篠田、俺たちはもうダメなんだろうか？　救助隊だってすぐには来られない。これから気温は急激に下がる。俺は死にたくないんだ。まだやることがある。家族だってある。死ぬわけにいかないんだよ」

泣きべそをかいているようにも見える。

「課長、わかっていますよ。私だってそうです。まだ死にたくないですよ。希望を持つんです。その希望が我々を生かすに違いないんだ」

「それにしても、寒いな。両足が激しく痛んで疼いている」

「体力が落ちてきたことも原因しているでしょう。とにかく頑張るんです。眠ってはだめですよ」

坂下にとって、篠田の存在が急に大きくなった。篠田がいなければ、生きる気力も失われるに違いない。

「篠田！　頼りにしている！」

「何を珍しいことをいっているんですか。課長らしくない。いつもの威嚇行為をやってくださいよ」

「威嚇？　俺がやっていたのは威嚇だったのか？　そうか、悪いことをしたな」

坂下は急に物分りのいい人間になった。

何時間かの後、ようやく噴石は止み時間が経つにつれ噴煙もなくなった。

秋の日暮れは、釣瓶を落とすように早い。いつの間にか、今度はすっかり星空が見える状態になっている。すると、最初の爆発から優に少なくとも五時間以上は経過したこと

になる。
　それからの二人は痛みと寒さとの闘いになった。十月の中旬を迎えた山頂は夜間、気温が急速に低下する。眠ることのないよう、二人は取り留めなく喋り続けた。骨折しているのに、何の手当も施されていない。手当が遅れると、骨折の後遺症はどんな形で現れるのか？　坂下は心配になった。が、ともかくも生き延びなければならない。
　眠ってはならなかった。痛みを和らげるには睡眠が必要なのだが、眠れば凍死の恐れがある。
　二人は生い立ちから家庭環境から趣味から、いろいろなことを話した。篠田には、坂下のこれまでの人生が必ずしも恵まれず、それどころか苦労の多いものであることがわかった。父親を幼少期に亡くしていたし、三人兄弟の長男で弟二人のために多くを譲り、我慢を重ねてきたこともわかった。学校も苦学して出た。ここで初めて、坂下と共感できたのである。
　篠田は、夜明けまで頑張れば生還出来ると思った。そう思うと途端に元気が出た。
「課長、あと少し頑張れば夜明けです。陽が昇れば、救助隊もやってきます。大丈夫です」
　坂下は泣き始めた。激しい痛みは持続していたが、生への希望が俄然大きくなって嬉しくなったに違いない。
　夜が白々と明け始めたとき、それは二人にとっては希望の光であった。だが、周囲を見回すと、一面灰色の殺風景な景色が広がっている。降り積もった灰の厚さは五十センチ、六十センチ、多いところでは一メートルにも見える。
　恐ろしいことに、彼ら二人がいる岩陰から十メートル周囲には、灰に埋もれ複数の人が倒れているのが見えた。灰に覆われているところから判断すると、恐らく息絶えている。一体何人の人たちが亡くなったのだろうか？　その光景に二人は改めて噴火の恐ろしさを思い知らされた。すると、まだ自分たちが生きているという実感が急に体内を巡った。
「ひどい事故に遭ったものだな。なんとか俺たちはまだ生きているが、これだって救助隊が来なければ、俺たちも危ない。篠田、携帯電話が通じるかどうか試してみてくれ」
　坂下は冷静さを取り戻しつつあった。篠田は背中に張り付いたままのリュックから携帯を取り出した。だが破損して使い物にならなかった。
「課長、ダメです」

そのときだった。突然、ヘリの爆音が聞こえた。上空をみると自衛隊のヘリが見える。そして、はるか麓の方向を見ると、オレンジ色の服を着た救助隊の姿も望見できた。二人は期せずして叫んだ。

「やったぁ！」

坂下が子供のような声を出した。このときほど、生きていることの喜びを実感したことはなかった。二人は飛び上がりたい気持ちをなんとか抑えた。

だが、なかなか消防隊員は火口まで登ってこられなかった。火山灰に足がすっぽりと入ってしまい、前に進めないのである。

ヘリの方が早かった。二人の姿を発見すると隊員の一人がヘリからロープを伝って下りてきた。

「大丈夫ですか？　動けますか？」隊員の声は二人にとって生きる希望そのものだった。

隊員は、坂下の体を自分の体に縛りつけ、空中に浮遊するヘリに運んだ。そして次には篠田も同様に救助されたのである。自分の体が徐々に空中を上昇するとき、その嬉しさといったらそれまでに経験した最高のものだった。生還できた喜びを篠田は言葉にできなかった。

だが、篠田がヘリに足をかけたとき、中にいた坂下が印象的なことをいった。

「何だ、お前もヘリコプターか。お前なんか、俺よりずっと元気なんだからタンカで麓に下りればよかったんだ。少しは遠慮するもんだよ」

篠田は失望した。

『へー、おっさん、そんなこというんだ。やっぱりな』

麓から登ってきた救助隊も少しずつ前進した。二人と同様に岩陰に隠れていた、元気そうな何人かをタンカに載せ、斜面を滑るように下ろしていった。一方、山小屋に避難し、幸い無傷の人たちは自力で下山できるよう誘導した。その中には、渡辺も宮田もいた。

結局、この災害で亡くなった人は五十名、負傷者数も七十名を超えた。戦後の火山災害では最悪の大惨事となった。

二人はY岳の麓にある救急病院に搬送され、そのまま入院した。比較的軽傷だった篠田は、十日ほどで退院したが、坂下の方は、胸部の精密検査や、左足の脛と右足の膝蓋骨が骨折していたため長引いた。とくに膝蓋骨の損傷が激しかった。二ヶ月近く会社を休み、やっと出てきたときは年

が明けていた。松葉杖の姿だった。そして医師の診断によれば、膝蓋骨の損傷で一生松葉杖のお世話になるらしい。会社に復帰した後、毎朝夕に奥さんが車で送り迎えをした。かいがいしく坂下の体を支えていた。篠田は羨ましいと思った。

『坂下には勿体ないくらい、いい奥さんじゃないか。大事にしなければバチが当たるよ』

しばらくして、仕事は平常に復してきた。そして坂下の口も滑らかなものに変わってきた。Y岳であれほど神妙だった男が職場では元の人間に戻った。

そしてまた怒鳴った。空気が震えるほどの大声だ。

「おいっ、篠田！　お前何度いったらわかるんだ！　こんな文書じゃダメだっていってるんだよ。いつまで経ってもわからない男だな。お前は本当の馬鹿だな」

篠田の方は、口に出さずに心で思った。

『馬鹿はお前の方だ。小心者のくせに、威張り散らすことだけは一人前だ。でもまぁ、こんな男でも家では一家の大黒柱だ。死ななくて本当によかった。まぁ、一生松葉杖になったのは、気の毒だったけどな。しかしあれが俺の出来るベストだった』

ところで、この話には後日談がある。

一年後のことだ。上司に弱く部下に強い坂下が東北支店の部長として栄転した一方、仕事を迅速正確にこなし、はっきりと上司に物がいえる篠田が中国支店の役職なしの社員として転勤させられたのだ。

（了）

廃村紀行

宮崎県・寒川（さぶかわ）

唐瀬　光

都に帰れない！

「えーっ、東京は大雪！　羽田も成田もダメ？」

一月の下旬、生まれ故郷で四日間を過ごした私は、帰京すべくやって来た宮崎空港のターミナルで、唖然と突っ立っていた。

「明日の便に振替予約ができます。運賃は今日の分がそのまま使えますが……」

カウンターの受付嬢が、気の毒そうな表情を見せる。

しかたがない、ここから東京まで九百キロ。新幹線も通ってないし、泳いで行くわけにもいかないから、明日の便に切り替えた。

そのまま空港前のレンタカー営業所に戻る。店の駐車場には、さっき返したばかりの白い軽自動車が置いてあった。それを、あと一日借りる。

今朝チェックアウトした高鍋町（たかなべちょう）のビジネスホテルに連絡

して、もう一泊を予約する。実家はすぐ隣の川南町（かわみなみちょう）にあるのだが、七年前に母が亡くなってから、ずうっと空き家になっている。電気は通っているがエアコンがない。冬は石油コンロで暖をとるのだが、燃料の石油を置いていない。留守の期間が長く続くので、可燃物は危険なのだ。なにせ仕事の都合で、三、四か月毎にしか、ここに帰ってこないのだから。

そういうわけで実家に寝泊まりするのは春と秋だけ。真夏と真冬は、暑いの、寒いので、とても眠れたものではない。おまけにガスも水道も止めてあるので、食糧や飲み水を買って来なければならないし、もちろん風呂も使えないから、隣町の温泉まで浸かりに行かなければならない。それやあれやを考えると、一泊五千円のビジネスホテルに泊まる方が、まだ気楽でいい。なにせホテルには風呂も朝食もついている。

軽自動車を運転して、一ッ葉（ひとっぱ）有料道路をひたすら北上する。右手には日向灘（ひゅうがなだ）が穏やかにうねり、左は延々と続く松林。その林の中に、私はまだプレイしたことはないが、割と有名なゴルフ場（フェニックスカントリークラブ）が広がっており、そこに建つ二棟のリゾートホテルが、黒松の上に角張った白い顔を突き出している。

やがて有料道路が終わり、国道十号線に出る。そこを三十分ほど北に向かって走ると、江戸時代に秋月（あきづき）氏の所領だった城下町、高鍋町に着く。

東京と時差が四十分ずれるとはいえ、冬の日照時間は短く、夕方六時はもう薄暗い。前方に『小丸新茶屋（おまるしんちゃや）』の赤提灯が見えて来た。私がよく食事をとる店だ。そこの駐車場に乗り入れ、バックで止める。

西の方を見上げれば、かつて私の学んだ高校が間近に建っている。店に入ると部活の帰りなのだろうか、奥座敷に母校の男女生徒たちが、四、五人、こちらの方言を丸出し

に、「おりがぁ、わりがぁ、どげんしたつね」と語り合っている。この地方でしか使わない言葉。でも、私の耳には実に心地よく聞こえる。生徒たちの黒い詰襟の学ラン、濃紺のセーラー服は今も昔も変わらない。

私が高校生の頃、部活終了後に、顧問の先生が、時々部員たちをここに連れて来たものだ。あの頃、この店は茶屋にふさわしい、木造の簡素な造りだった。

（あれから、もう五十年……半世紀が過ぎた……）

私は後輩たちの故郷訛りを聞きながら、年月の早さに驚くとともに、何だかとても寂しい思いにかられた。

店を出ると、駐車場の裏手から車を狭い路地に乗り入れ、高校の正門前に出る。そこを右に曲がり、通学路を西に走る。

途中のスーパーで明日の食糧を買い込み、学校帰りの後輩たちを追い越しながら、立花神社の前を通る。

この神社の由来は、日本史の課外授業で引率の先生が語ってくれた。その内容は、ほぼ忘れてしまったが、なんでも戦国時代から続く古い神社だということは覚えている。

境内の入口に建っている大鳥居の前を過ぎると、一級河川小丸川を渡る。この川は尾鈴山系の南側を大きく迂回しながら、上流の木城町を通り、高鍋の北側、切原地区を割るように進んで、日向灘に流れ込む。

木城町の中心には高城という城跡があり、ここは戦国時代、伊東氏の居城で、薩摩の島津軍に攻められた時、豊後の大友宗麟に助けを求めたことから、『九州の関ヶ原』といわれる、大友と島津の一大決戦が行われた。

結果は島津軍の圧勝、大友軍のボロ負けに終わり、北日向（今の延岡市）に、『無鹿』というキリスト教の理想国を創ろうとしていた宗麟の夢を、粉々に打ち砕いた。

この戦いを、地元では『高城川の戦い』というのだが、歴史書にはなぜか『耳川の戦い』となっている。小丸川と

耳川では、距離にして二十キロも離れているというのに。

やがて今夜一泊するビジネスホテルに帰って来る。ここの五階の部屋から、小丸川の向こうに高鍋の街明りがよく見える。

（明日、一日なにして過ごそう……）

飛行機の出発は午後六時過ぎだから、日中こちらで過ごせる。実家の掃除や庭の草刈りはもう済んだ。明日は平日だから、友人や知人は仕事に出かけているだろう。

（あそこに、行って見ようか……）

ふと、そんな考えが浮かんだ。

宮崎県の内陸部に、昔『妻』と呼ばれた都市があり、その山奥に三十年ほど前に廃村となった『寒川』という集落がある。私は廃墟というものに、かなりの興味を持っているので、二年前、その村に行ったことがある。荒れた屋敷、廃校となった校舎が、草木におおわれ、崩れるように眠っていた。

（あれから、どうなったか……）

都会の喧騒の中にあっても、時々、あの寒々とした風景が心の奥によみがえって来る。

（よし！　明日は廃村探訪だ）

ホテルの窓から、遠くに広がる黒い山並みを眺めながら決心した。

翌日の朝、一旦実家に戻る。玄関のカギを開け、ドアを横に滑らす。

「ただいまあ」

一応、奥に向かって声をかける。何年か前までは「お帰り」と年老いた母が出迎えてくれたものだが、今では誰の声もせず、庭の木立がサワサワと風の音を立てているだけだ。

荷物を玄関の上がりかまちに置き、畳敷きの部屋に上が

る。着ていたブレザーとズボンを脱ぎ、昨日クローゼットに仕舞った作業着を出して着替える。

帽子も、昔、親父の使っていたカーキ色のキャップ帽をかむり、靴棚からスニーカーを出して履く。山間を歩くのだから、それなりの服装が必要だ。

ナップサックにパンとペットボトルを入れ、それを肩に担いで外に出る。再び玄関にカギをかけ、軽自動車に乗り込み、さあ、出発。

尾鈴山を右手に眺めながら、きれいに舗装された県道を西に行く。東京は大雪で交通がマヒしているというのに、こちらはポカポカと暖かい春のような陽気。窓を開けて涼しい風を入れ、赤茶けた田畑の広がる冬の道路を、宮崎平野の奥、山々が繋がる西に向かって、ひたすら車を走らせる。

寒川（さぶかわ）集落

走ること三十分、車は西都（さいと）市街に入った。私が子供の頃、この都市は西都ではなく『妻（つま）』と呼ばれていた。太古からある集落で、魏志倭人伝に出て来る『投馬国（とうまこく）』のあった場所だという説がある。

『投馬……妻』……『トウマ……ツゥマ』

（なるほど、響きが似ている）

それにここら一帯には、邪馬台国があったとされる三世紀あたりの古墳群が大規模に分布している。古代、原初的な国家形態が存在したのは間違いない。

市役所の前を通り、市街地を抜けると、また田園地帯に入った。県道をひた走り、三財（さんざい）地区に出る。もうすぐ寒川に通じる入口があるはず。狭い道路なので、見つけるのが大変だ。二年前に来た時には、うっかり通り過ぎてしまっ

た。

そのまま走っていると、前方に『寒川』と矢印の出ている標識が見えた。注意深くスピードを落とす。やがて右手になんの変哲もない横道があった。

（ここだ！）

ハンドルを切り、右横の道路に乗り入れ、そのまま道なりに走る。

しばらく行くと、軽自動車でさえすれ違うのが難しい幅の狭い山道に入った。右側は切り立った崖が天を突き、左は落ちたら助かりそうもない深い谷。五、六十メートル置きに道幅が広くなっている所があり、途中で対面した車は、一方がそこまで後退しなければならない。

慣れている者ならともかく、めったにここを走らないドライバーは、この曲がりくねった細い崖道を、何十メートルもバックするなんて、身の縮む思いがするだろう。

（どうか、先方から車が来ませんように……）

それだけを祈りながら、山間の道路をゆっくり走る。うっそうと茂る山林の下を、右に左にハンドルを切っていると（はたして、この道でよかったのだろうか）という疑いがわいて来る。いつまでも続くこの状態に、気持ちが山に飲み込まれそうになる。

その時、突然、目の前に一台の軽トラックが現れた。あわててブレーキを踏む。ここはすれ違いのできない狭い場所。片方が、道幅の膨らんでいる所まで下がらなければならない。どうしようかと迷っていると、対向車の方がバックしてくれた。

窓を開けて、作業帽をかむったそのおじさんに「すみません」を言う。ついでに「寒川へ行くには、この道でよかっとですか」と聞いてみる。

すると相手も窓を開けて「いいっちゃけん、途中から石がゴツゴツしちょるかい、車じゃあ、奥まで登れんよ」と教えてくれた。

「ありがとうございました」

礼を言って、また車を進める。

発電所の付近を通り、三財川を遡ること十数分。コンクリートむき出しの狭い橋を渡ると、道が二つに分かれていた。右側がダムに行く道。左が寒川集落。

左にハンドルを切り、さらに狭い道に入る。おじさんの言った通り、アスファルトは割れ、徐行しながら走るも、タイヤが道の穴ぼこを踏むたびに、車がガタガタ揺れる。

さらに傾斜が急になり、ここから先の運転は危険。道幅の広くなった所に車を置き、徒歩で登る。

傾斜十五度、いや二十度はあるかと思える急な坂道。その勾配は一般の車が登れる限界に近い。平坦な道しか走ったことのない私なんかが乗り入れたら、たちまち崖下に転がり落ちるだろう。

舗装はされているが、所どころ表面のアスファルトが剥げ、ボコッ、ボコッと穴が空いている。おまけに、崖の上から大きな石が落ちて、そこら一面に転がって……。

（ん？　転がって……ない）

二年前に来た時は、確かに倒木や石ころが路上に散乱し、とても車で登れるものではないと思ったものだ。ところが、今日はアスファルトの割れた穴はあるにしろ、路面がきれいになっている。元住民たちが片づけに来たのだろうか。彼らは現在、麓の西都市内に住んでいると聞く。

取りあえず、ある程度整理された細い道を、黒いナップサックを肩にかけ、えっちら、おっちら、息を吐き吐き、足を運ぶ。

登ること三十分。二キロメートルは歩いただろうか。右手の崖をくりぬいて、小さな仏像が二体、並んでいた。その祭壇に水の入った湯呑がいくつか置いてある。ここを通る人が拝んで行くのだろう。私もその前で手を合わせ、頭を下げる、

そこからさらに行くと、木々の間に民家の屋根らしきも

のが見えて来た。息が上がりかけたところで、駐車場のような平坦な場所に出る。

そこを登ると、苔むした頑丈な石垣が幾重にも並び、その上に木造の平屋が何軒か建っていた。だが、それらの建物は、屋根が崩れているもの、完全に崩壊しているもの、とても人が住めるものではない。

この集落が廃村になったのは、平成元年と聞くから、もう三十年、いや二十九年も昔になる。ネットで検索すると、この村は四百年以上の歴史を持ち、五、六十年前は二百人もの人口があったというから、かなり大きな集落だったのだろう。村には居酒屋もあり、毎年、神楽（かぐら）祭りを見に、各地から客が来た。その人たちが寝泊まりする、旅籠（はたご）のような宿もあったという。

主な収入は木材の切り出し、山菜の販売だったが、急激な高度成長の波に追いつけず、若者は次々と村を離れ、賑やかな都会に出て行ってしまった。後は高齢者だけになり、それも今から二十九年前に、残っていた六世帯十三人が集団で離村したという。

彼らは、長年使っていたカマドや流しを、二度とここに戻って来られないように、泣きながら叩き壊したというから、その心情はいかばかりであっただろう。きっと、自分の血肉を削り取られるような思いを味わったに違いない。

（これは、今、我々の住む日本の姿だ）

寒川のような廃村、またもうすぐ住民のいなくなる限界集落が、日本全土に二千ヶ所もあるという。

（実にもったいない……）

日本は国土が狭いというけれど、利用できる土地は、まだいっぱいあるではないか。

（なんとか、ならないものか……）

暗澹たる気持ちで、壊れた家のそばを歩いて行く。家の中には変色した新聞や雑誌、割れた茶碗などが散乱してい

た。錆ついた子供の三輪車まで転がっている。
どの家もそうだ。離村する時に片づけて行かなかったのか。それとも、亡くなった家族やご先祖様が寂しがらないようにと、ここに残して置いたのだろうか。

崩壊した家屋の間を縫うように歩いていると、上に向かって伸びる石の階段があった。石の表面には苔が付着しているが、まだじゅうぶん登れる状態にある。そこを注意しながら、一段一段歩を進める。
すると狭いけれども、割と平坦な場所に出た。そこには、杉林に囲まれた一軒の小さな家が建っていた。ここまで見て来た無残に崩壊した家屋ではない。きれいに整備された祠のような建物。扉の上に締め縄が張られ、入口の石段には水の入った湯呑や花が供えてある。
これは古い神社。住民がいなくなった今でも、時々誰かがお参りに来ているようだ。

石垣で支えられた細長い敷地を歩きまわっていると、むき出しのコンクリートで四辺形に縁取られた、プールのような池があった。
水は溜まっているが、プールにしては狭すぎる。その中には小さい魚がたくさん泳ぎまわっていた。それに縁にはポリエチレンの丸い水道管のようなものがついており、それが下の方に繋がっている。
（これは、貯水槽……？）
わき水や雨水をここに溜めて、集落の各家庭に引いていたのだろうか。だが今では底に泥が堆積し、その水はとても飲めるとは思えない。

小さなかわいらしい神社の前を通り過ぎると、さらに上に続く長い石段があった。二年前に一度来たからわかるが、この先には学校がある。その階段を一歩、一歩、踏みしめながら登る。

石段の尽きる所に苔の付着した二本の門柱が立っていた。その角張った柱の脇にはコンクリートを流して作ったのだろうか、犬のような形をした二体の動物像が並んでいる。かなり風化が進み、顔立ちがはっきりしない。昭和五十三年に閉校になったというから、もう四十年も雨風にさらされていることになる。

門柱をくぐると急に平坦な場所に出る。左手に木造の校舎が建っており、右側は草の茂った五、六十メートルほどの平らな地面。

ここは、おそらく運動場。毎年秋には、ここで運動会が開かれていたのだろう。小中学校合わせて十人ほどの生徒と数名の先生。それに集落の大人たち全員が参加する運動会。それは、単に学校の行事というだけではなく、村を上げての大イベントだったに違いない。

それも、今は思い出だけが残り、その平らな細い地面は、赤茶けた冬枯れの草葉におおわれていた。

校庭に足を踏み入れると、平たい石碑のようなものが建っている。そこには『西都市立寒川小中学校之跡』の文字が彫られていた。

その周辺には、石像が二体。一体は赤子を背負った少女。もう一体は、頭に三面の顔を持つ阿修羅像。いずれも風化して、数十年の歳月が過ぎたことを思わせる。

校庭横の掲示板には黒い墨で、五線譜のついた校歌が書かれていた。

四十年前に閉校になったにしては、音階も歌詞もしっかり読めるから、誰かが定期的に書き替えているのだろうか。

石像の向こう、林の中に、朽ちかけた木造の校舎が建っていた。まるで公民館を思わせるような平屋建て。入口には錆ついた丸い拡声器が顔を覗かせている。

校舎の左手は急な崖になっており、高い石垣で固められている。その縁に立って崖下に目を向ければ、無数に立ち

並ぶ木立の間に、崩れかけた家の屋根が、そこここに点在している。

（ここは高台。この小中学校が、村の中心的存在だったのだろう）

学校が閉鎖されて十一年後に、残る住民が集落を離れ、完全な廃村となっているから、子供のいない社会というのは、彼らを育てる若い親もいないということ。後は老人ばかりの、消滅を待つだけの、うら寂しい集落になって行くのだろう。

校舎と崖の狭い道を用心しながら歩いて行く。教室の窓は壊れ、中を覗くと、板張りの天井は今にも剥がれ落ちそうだ。床もカサカサになり、人が普通に歩けば、踏み抜くこと間違いない。

教室の壁や黒板には、いろいろな絵や文字が殴り書きしてあるが『妻高校に合格しました』の文字が私の目に映った。

妻高等学校はこの山の麓、西都市にある県立高校。この中学を卒業した生徒が街に下り、人生に新たな一歩を踏み出した喜びの声に違いない。

これを書いた少年あるいは少女も、今は広い日本のどこかで生活しているのだろうが、この村で育った思い出を忘れることは決してないだろう。

校舎を離れて校庭に戻る。すると運動場の奥に、樹木におおわれた石段が見えた。

昨夜、ネットで調べたところ、この上には鳥居を持つ神社が建っており、村が活動していた頃には、毎年神楽祭りがあったという。それを遠方から見物に来た観光客を泊める宿もあったと出ていたから、かなりの規模だったのだろう。

杉林に囲まれた神社の境内で、赤い鬼面の男神と、白い女面の女神が織り成す古代の舞は、さぞ幻想的で美しかっ

ただろう。村人はもちろん、遠方から来た客も、じゅうぶん祭りの夜を堪能したに違いない。

それが、今は人の気配は一切なく、風が通り過ぎる木立の葉音だけがサヤサヤと流れている。

神社まで登ろうと、校庭に踏み出したところで、ふと腕時計を見る。すると、もう午後一時を過ぎているではないか。飛行機は六時二十分発だが、一時間前には空港に着いておきたい。

これから一旦、川南町の実家に戻り、今着ている作業着をブレザーに着替えなければならないし、家に置いて来た荷物も持って来なくてはならないから、遅くとも三時までには家に着かないと。

ここから軽自動車の置いてある途中の道に出るまで、歩いて三十分。そこから車をとばして、川南に着くまで一時間。さらに、家から空港までが一時間半。途中、渋滞に巻き込まれれば、もっとかかる。

（もう、ここを出なければ……）

今回の探索はここで中止。学校の高台から崩れかけた家々の屋根を眺める。昔は多くの人が生を営んでいたであろうこの集落も、今は静かに眠り、朽ちて土に還る日を待っている。崖の上に立っている鹿のような二体の動物も、消滅していく村落の姿を、寂しそうに見つめている。

校門を出る時に後ろを振り返り、校舎や少女像に別れを告げる。それから苔むした石段を下り始める。

門柱の横に座っている二体の犬らしき石像にも「達者でな」と声をかける。途中に建っている小さな神社にも、そっと手を合わせた。それからスマホでまわりの風景を撮りながら、この集落を後にする。

村の出口でまた振り返り、壊れた家々に向かって「行って来るよ」と別れを告げる。ここには、まだ二回しか来ていないのに、なんだか自分の産まれた村にいるような、な

つかしい気持ちになっていた。

故郷を後に

軽自動車でさえ通れるかどうかわからない細い道を、まわりの風景を眺めながらテクテクと下る。薄暗い杉林の向こうに、ゴーゴーと流れる沢の音がする。やがて二体の道祖神が崖の窟に鎮座している所まで出た。来た時と同じように手を合わせて拝む。

かってこの道は、よく崖崩れが起こって、通れなくなったのだろう。左手の切り立った法面には、所どころ厚いコンクリートが崖上まで吹きつけてある。

曲がりくねった細い坂を下りること三十分、さっき車を置いて来た所に出た。ここまで乗って来た白い軽自動車は、そのままの姿勢で、私の帰りを待っていた。ナップサックを助手席に置き、運転席に乗り込む。ここはUターンのできる幅の広い所。車を切り返し、今度は川を右手に見ながら、すれ違いの困難な山道をゆっくり下る。

来た時と同じように、対向車が来ないようにひたすら祈りながら、長い徐行運転を続けたが、不思議とすれ違う車はなかった。

やがて道幅が少しずつ広くなり、麓の村落に出る。そこを抜けると、車の行き交う広い道路に出た。身の縮む思いで運転して来た私にとって、この時ほどホッとしたことはない。左右に田畑を眺めながら、ぐんぐんスピードを上げる。三十年前、寒川を集団離村した人たちは、この辺りに引っ越したとネットに出ていたが、彼らは、まだこの世に存命しているのだろうか。

西都市街を抜け、東九州自動車道のガード下をくぐり、県道を東に走る。高鍋町に入ると、私が実家に泊る時に毎晩浸かりに来る温泉がある。そのそばを通り、しばらく行くと国道十号線に出る。そこを北にハンドルを切ったとこ

ろで、急に空腹を感じた。
そう言えばまだ昼食をとってなかった。ナップサックに入れたパン類はそのまま残っている。これは夕方、飛行機に乗る前に食べることにしよう。
高校の近くにある『小丸新茶屋』に寄り、いつものように『釜揚(かまあげ)げうどん』を注文する。平日の昼間なので店の客は少ない。窓際に席をとり、外の街路を眺めるも、母校の生徒は見えない。後輩たちはまだ授業中なのであろう。
食べ終わると、また十号線に乗り入れる。小丸川を渡り、昨夜泊ったビジネスホテルを右手に、実家のある川南町に向かう。目の前に広がっている坂を登り切ると、平坦な高台に出る。
ここからだと尾鈴山系の青い峰々がすぐ間近に見える。道路の左右には、みごとな茶畑が一面に広がっていた。近くに茶工場があるのだ。
この道は高校時代、私の通学路だった。その頃は、学校まで自転車で通っていたから、帰りにここを通るのは夕方の六時頃。天気のいい日は尾鈴山の向こうから紅色の夕焼けが立ち昇り、空一面に広がって、この世のものとは思えない、荘厳な風景を見せていたものだ。
二年生の頃だったか、下校して家に帰る途中、自転車をこぎこぎ、ここを通りかかると、セーラー服を着た女の子が二人、自分たちの乗って来た自転車を脇に置き、畑の畔に立って、互いに見つめ合っていた。よく見ると、私と同じクラスの子だ。
(なにをしているのだろう……)
そばを通る時に挨拶しようとしたが、そのあまりに真剣な様子に、声をかけるのがためらわれた。彼女たちは、近くを通る私に気づいているのかいないのか、こちらには一瞥もくれない。
(喧嘩でもしているのか)
そう思ったが、彼女たちの顔は恍惚として、ヒシと互い

の目を見つめている。
（あれは、なんだったのだろう……？）
あの光景が五十年経った今でも、目に焼き付いている。いつか彼女たちに会ったら、聞いてみようと思うのだが、今だに会う機会がない。
（時間を遡れるものなら、もう一度、あの頃の自分に戻りたい）
時々、この痛切な思いが胸に浮かぶ。

十号線をさらに北上したところで、脇道に入る。そこを一キロ走れば、私の実家がある。実家といっても、両親はすでに亡く、子供は私一人だから、相続で苦労することはなかった。したがって、今、この家の所有権は私にある。
荒れはてた庭に乗り入れ、玄関口まで車を持って来る。子供の頃は、近所の仲間たちを集めて、この庭でソフトボールをやったものだ。それが、いつの間にか灌木が茂り、今はもうあの頃の面影はない。
高い杉林に囲まれ、ひっそりと建っている平屋。まるで、さっき見て来た寒川の集落を思い出す。私が年に三回か四回、千葉から帰って屋内の掃除や庭の手入れなどをしているから、なんとか持っているが、これをやめたら、たちまちあの廃屋みたいになるだろう。
玄関を開けて中に入る。雨戸が締めてあるので、部屋の中は薄暗い。電気を点けようかとも思ったが、またブレーカーを上げなければいけないので、そのままにしておく。
玄関のガラス窓から入って来る外の光を頼りに、カーキ色の作業着を脱ぎ、よそ行きのブレザーやズボンに着替える。それから黒いリュックを背負い、革靴を履いて庭に出る。
玄関を締める時、家の中に向かって「さようなら」と声をかける。昔なら「気をつけてな」とお袋の声がしたものだが、今では木立のそよぐ音だけが静かに流れている。

軽自動車の後部座席にリュックを放りこみ、エンジンをかけて車をターンさせる。誰もいない家に向かって、もう一度「さようなら」を言ってから、車を発進させる。

遠くに霞たなびく尾鈴の山稜を眺めながら国道十号線に出る。小丸川を渡り、高鍋町を抜け、昔、島津家の所領だった佐土原（さどわら）方面に下ると、フェニックス並木の美しい一ツ葉有料道路に入る。その道をひたすら南に走る。やがて宮崎市内を流れる大淀（おおよど）川を超えた所で、昔、海軍航空基地として作られ、今はブーゲンビリアの愛称で親しまれる、南国情緒豊かな宮崎空港が見えて来た。

今回の帰省旅行はここで終わり。次回は五月のゴールデンウイークとなろう。その時、また寒川を訪れてみよう。それまで、あの木造の古い校舎が持ちこたえてくれればよいが。

（了）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の文芸活動を行う。

・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行すると共に、ウェブサイトにその全文を発表する。

・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し、発表する者とする。

・会員は、年会費千円を負担すること。ただし、年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。

・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。

・作品の長さについては特に規定しないが、1回に掲載できる枚数は、原稿用紙で１００枚以内とする。

そよのバアバの空中サロン

―その五　うまずたゆまず―

中川　とら

秋の夕べ、わたしはおばあちゃんちのベランダに出ていた。西の空が、なごりおしそうに朱色の雲をかかえている。こんな日は、日が沈むまでここを離れたくない。

いつもなら、忘れかけた頃にやって来るわたしの慢性ゆううつ症が、最近ピークに達したらしく、やたら胸苦しくてたまらないのだ。

高い所で風にあたり、空でも眺めていたら気が晴れるのかなと思ったが、絵のような風景も消えてしまえばそれまでで、心のたまりは簡単には流れない。

原因は、ぼんやりと分かっていた。

わたしには、共感し合える友人がいなかった。小さいうちは気にならなかったが、中学生にもなると人と話がかみ合わないのはちょっと困りものだ。相手が笑っていても、わたしにはバカくさくて、それがどうしたのだという具合。度重なれば、その場その時間も苦痛となる。

見方を変えれば、友人にとっても反応の鈍いわたしは、いっしょにいてほしい人ではなくなるというものだろう。

かくして今、わたしはとても生きにくい思いでいっぱいだ。

本や新聞を読む人が周りには、ほとんどいない。ＳＮＳもラインも関心を持てない。わたしは自分の目でよく見、自分の耳をそばだててよく聴きたい。物事をなぜだろう、何が原因なのだろうと考えるのが好きだ。キラキラ落ちつきのない画面より、紙の色やにおいがおちつく。

お笑いも腹をかかえて笑うことはめったにないし、やたら人の言動をちゃかしているようにしかうつらない。爽快感とはほど遠いから興味が長続きしない。記憶に残りませんって感じになる。

それでも、日々友人が少なくなっていくのは、やはり寂しくないと言ったらうそなのだ。

「カズネッチってさ、重いよネ」
「そう」
「マジ、深刻に考え過ぎって感じ」
「自分では　普通よ」
「なんか　違うよ　わたし達とは」
「個性だから　いいのよ」
「おもしろくない！　みんなもそう思っていると思うよ」

ついこの間、幼い頃からの唯一の友、美和ちゃんに、こんな風に言われた時は、奈落の底に突き落とされた気分だった。

夜、トイレで「このクソヤロー！」と三回大声で怒鳴った。母が血相を変えて、「和音！　どうしたの！」とドアを叩きつづけたので、わたしは用を済まし「別に」と涼しい顔で出てから、思いっきり寄り目をしてごまかした。

「別にって、あなた……」

母の視線を背中に感じながら、自分の心のやり場にわたしは苦しんだ。

「おばあちゃんと話すことって、わたしにとって、どんな意味がある？」

窓を閉め部屋に入ったわたしは、洗たく物をたたむ祖母に質問した。台所の方から野菜の煮びたしのにおいがしてきて、（ああ、いかにも年寄りの家だ）とわたしは思う。

「何？　突然」

「だって、わたしの話し相手って、ほとんどがおばあちゃんでしょう」

「いいんじゃない。世の中にはおばあちゃんがほしくてもい

ないという人も多いわよ」
「そうね」
「わたしも、もう何年でもないからいやがらずお付き合いして下さいな」　そう言うとバァバは「うふふ」とくったくのない表情で笑った。
「わたしは子供なのに、七〇歳の心に染まっているわ」
「おやおや　悲観的だこと」
「みんながわたしの事、重いって。年寄りみたいってことかな……」
「気になるの？」
「……少し」
「あなたらしくもない」
　わたしは返す言葉がなかった。

　このところ土曜日は、祖母の家に泊まる習慣ができていた。友人がスマホゲームをいじくっているであろう時間、わたしはバァバとたわいもない話をしたり、本を読んだり、宿題をやったりする。静かで整頓された空間は物事に集中しやすく、それなりの居心地のよさがあった。

　その晩、布団に入ってもなかなか寝つけなかった。
　奈落の底は、古民家の跡地になっているらしく、荒涼とした空地には朽ちたブランコが一台あるだけで、さっきからわたしは一人風に吹かれながらそこに立っている。そうして悲しいかなこの心の風景は、なかなかつぎのコマに進まない。
　息苦しいので、寝返りを何回もうちながら深いため息をするしかなかった。
　そうしているうち、わたしの脳裏に、ある景色のひとコマが浮かび上がったのだ。はじめはぼんやりしていた輪郭が、やがて鮮明となってそれは動き出した。

　夕暮だ。空が朱く燃えている。
わたしは、庭先で、ある人達をまっている。晴れた日の夕方、必ず我が家の前の道を通っていく人達だ。父は庭の落葉を上手に掃き集めている。
　どのくらいたっただろう。やって来た！　音でわかる。そうあの音、下駄の歯音が近づいてくる！　耳を澄ますと、その中に（ズーズー）とゆっくり土を削るような音がまじっているから。城田さんの家族だ。

父が門前に出て行き「いやー、きょうもいい天気でなによりだ」と言った。
おじさんは五十半ば、すでに頭髪が寂しかったが、体格のいい人で姿勢もよく、健康そのものの感じの人だ。おばさんもふくよかな体型で、顔色がよくニコニコしている。
二人は、自分達より少し背の高い体の不自由な息子さんの腕を、両サイドからしっかり支えている。
健一さんというんだよと、以前、父に教えてもらった。小さい頃、小児麻痺を患っての今の姿だ。体全体が残酷につっぱって、歩行が困難な健一さんは、時々言葉にならない声を出しながら賢明に足を運ぶ。
父の呼びかけに、おじさんはしっかりした声で「そうですねー。助かりますよ」と答えた。
夕日は、真正面から三人に降り注ぐ。それぞれが体いっぱいに光をうけて、その表情は神々しいほど輝いている。
わたしは、心の底から湧きあがってくる不思議な感動を覚えた。
しかし同時に思いもよらぬことが起きた。
健一さんがわたしの前を通り過ぎようとしたその時だ。彼の下駄が傾いた足下からスルッと逃げてしまったのだ。突然のことに、「あぅー！」と大声を上げて健一さんは慌てている。口元から透明なよだれがスーと垂れ、五分刈りの頭全体がキラキラして大汗をかいているのがわかった。
おばさんが手際よくおじさんに、止まって一人で健一さんを支えてくれるよう言った。
そのわずかな隙に、わたしは反射的に駆け寄り、転がった健一さんの下駄を彼の足下に置いた。かすかに触れたそれは、柔らかで汚れのない赤ちゃんのような肌だった。
おばさんはしゃがみこみ、鼻緒を注意深く確認した後、わたしに言った。
「ありがとうね」
わたしは、小さい声で「はい」と応えたきり、なにもかもが眩しすぎて顔が上げられなかった。

父とおじさんは、戦時中、東京の千住製絨所で働いていた。軍服を生産する軍需工場だったらしい。父は事務職、おじさんは現場の部門責任者と違ったが、社宅になっていた同じ住宅に住んだせいか、なにくれとなく言葉を交わす機会が多か

ったようだ。
終戦を迎え、この社宅が民間に払い下げになり、二人は社宅の対角の端に家を買い求めた。
だが、平和になったからといって、人生の試練はあたりまえのようにやって来る。
やんちゃな父は転職を繰り返し、多額の借金に苦労し、堅実なおじさんは息子の病に苦しんだ。
しかし、言わずもがな同じ時代を共に生きた二人は、自分にない相手の個性を気に入り、友情を育ててきたと言えよう。
父は日曜の夕方必ず、庭先に出るようになった。友の家族を、見守りつづけたかったのかもしれない。

我が家の庭先を通り過ぎた城田さん家族は、その先の土手に向かって歩いていく。
西の空一面がまっかになると、そこに三人の極上の黒いシルエットが現れた。
やがて、映像は静かに幕を下ろした。

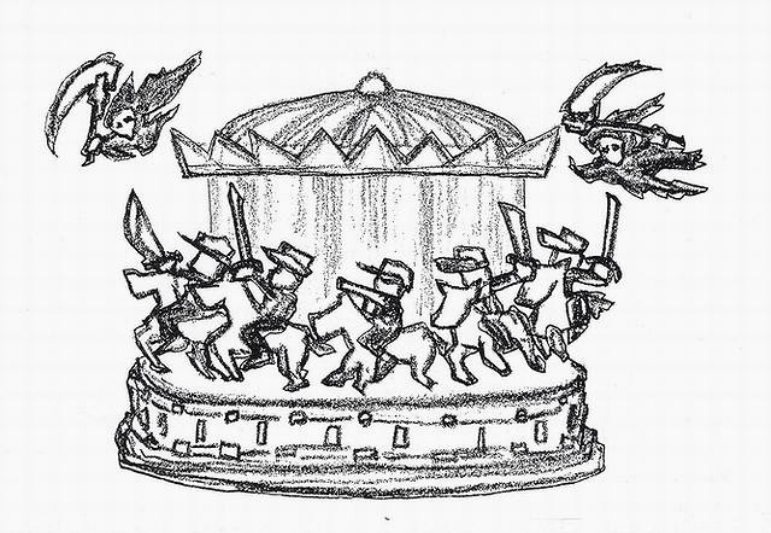
布団から出て、わたしは深夜のベランダに出た。遠くのスカイツリーも灯を落とし、夜空は星でいっぱいだ。
城田さん家族のことは、実はわたしが小学生だった頃、祖母に少女時代の記憶として聞かされた印象的な話だった。
その時、熱ぽっく語るバァバの眼に涙がいっぱいだったことが忘れられない。

わたしは思う。はたして、年を取ったとき、自分はあの西の空のシルエットとなれるだろか。思わず自分の手で冷たくなっていく自分を抱きしめた。
ああ、強くなれわたし。強くなれわたし。そう言いきかせながら。

（その五　おわり）

小説「回転木馬」に見る友情と愛

畑中康郎



昭和の前半期に活躍した人で中村真一郎という作家がいた。その作家が書いた小説のひとつに「回転木馬」がある。主人公は八人の男性と一人の女性という設定だ。

ヒロインは忍初枝というのだが、彼女は曳馬武人という頭脳明晰にして、スポーツ万能な青年の恋人として登場する。昭和十年代、戦争の足音が徐々に近づいてくる頃の話だ。

曳馬は、ある旧制高校の八人の仲間で作った「人類の未来の会」のメンバーのひとりだった。そこに初枝も加わって九人のグループになる。彼女は曳馬以外の七人のすべてが憧れる存在だった。しっかりした自らの考えを持ちながらも曳馬の前に決して出ない。いつも控え目で曳馬を陰で支える、そんな頼れる女性だった。二人は結婚を約束していた。

そのころグループは全員が純粋で、世間の不正や嘘を許さない若さと正義の心を持っていた。未来の日本を背負い、自分たちこそ国家をより良い方向へ導ける人材だと自負していた。気力は充実し、自分たちに不可能なものはないと信じることができた。各人の持ち回りで毎月異なるテーマを提起しては、天下国家の諸問題を議論した。それが彼らの人生における絶頂期だったに違いない。

その中でもリーダー的存在が曳馬だ。切れ者の彼が展開する論述は他のメンバーの追随を許さなかったし、そのことはメンバーのすべてが暗黙裡に認めていた。初枝の曳馬に対する気持ちはその度に確信に変わり、尊敬の度を深めていった。

このメンバーが旧制高校を終え、社会に出た。そして東京で同窓会を催したのは、卒業後二十年が経ったころである。ただし、出席したのは七人だった。残念なことに曳馬が戦死したからだ。戦死公報に接したときの、初枝の落胆は見るも気の毒なほどだった。人生の価値は色褪せ、生きる目標を失ったためにきっかけさえ整えば死を選んだであろう。ところが、たまたま彼女を精神的に助ける人がいて、死を免れたのだった。

同窓会メンバーは、大学助教授の阿蘇、ラジオドラマ脚本家の吉見、二流業界紙記者の荒巻、ヌード写真家の木曾谷、会社部長の磯村、地元町会議員の藤崎、そして同じく地元役所に勤める係員の鈴木。この七人だった。

鈴木は、二十年の歳月を経て再会した六人を見たとき、気持ちが次第に萎えた。六人にかつての面影はなく、精神的に老化が進み、当時持っていた正義もあらゆる理想も失っていた。そしてそのことに、彼ら自身、何の不都合も嫌悪も感じていない。堕落したことにも気づいていなかったのだ。

最も勉強好きだった阿蘇は今や俗物化し、教授昇格だけを一日千秋の思いで待つだけのつまらない人間になっていた。学問によって世間にその名を知らしめるまでになりたい、そのためには一分一秒も無駄にしないで徹底した研究姿勢を貫くと考えていた人物が完全に俗物となっている。他の連中にしても、それぞれ理想を持って生きてきたのに自分自身を裏切った。吉見はマスコミで売れさえすればいいような、およそ自分が理想とした文学からはかけ離れた下世話な世界に沈潜していた。荒巻も若気の至りで間違って手を出した女性と惨めな結婚をして、毎日を後悔しながら空しく過ごしている。そのうえ仕事も大新聞の記者から今では二流業界紙で提灯記事だけを書く身に落ちていた。毎日の飲酒だけが楽しみで、給料の前借りを頻繁に繰り返していた。木曾谷は写真家として女性の裸ばかりを追いかけ、隙さえあればそうした女性と浮気を楽しむような人間になっていた。藤村は会社での立場を利用して出張先で水商売の女との情事に耽る有様。それが露見して妻との間に隙間風が吹いている。藤崎は一応、

町会議員として働いているように見えるが、実際のところ利権に浸かり、税金を自分のためにどう使うか腐心している。鈴木だけが当時の理想を守っていた。彼は相変わらず売れそうもない小説を書いているが、心は純粋で何とか中央文壇に出たいと考えている。そのために、今回の同窓会を利用して脚本家の吉見に作品を見てもらおうと思い、原稿の束を持参していた。ついでに、地元役所主催の文化セミナーに大学助教授の阿蘇に講師になってもらいたいとも考えている。

因みに、この鈴木の妻になったのが初枝だった。初枝は曳馬の戦死を知って絶望し、戦況悪化とともに鈴木の近くに疎開してきた。鈴木は初枝に様々な援助の手を差し伸べるうちに彼女の生きる気力を取り戻してやり、二人は結婚した。この事実は六人全員が知らなかったから、同窓会ではこのことも披露するつもりだった。

鈴木は二十年前と同様な気持ちで仲間を見ていたし、期待もしていたが、誰もが彼の思うような人間ではなくなっていた。皆自分本位になっており、人生に余裕が感じられない。したがって友情の名に値する行動を取れる人間はいなくなっていた。

鈴木が原稿を見せようとしたとき、吉見は多忙でそんな時間はないと言下に断ったし、阿蘇への講師要請は田舎の一係員の依頼では歯牙にもかけず、まったく無視された。

鈴木にとっては、六人との再会は失望でしかなかった。会わずにいた方が、どれだけ夢を見続けられたか。理想に燃えていた六人は、見事に世間の荒波で堕落していた。生きるということは何と残酷なものだろうか。このことを最も感じたのは鈴木であったろう。

鈴木は懇親会の場で初枝と結婚したことを全員に話したが、当時あれほど憧れの的であったのに彼ら六人は現在の初枝に何の関心も示さなかったし、感想もなかった。全員が無感動になっていたのである。

同窓会が終わり、阿蘇はさっさと家路についた。荒巻はいかがわしいバーに独りで出向き、やけ酒をあおってバーテンダーと口論になり道に飛び出したところを車にはねられて死んだ。後の四人は一緒におかまバーに行って愚痴をこぼす。それぞれに屈託を抱えて日々心から楽しむことなく人生を送っていたのだ。

鈴木はメンバーの変わりようと失われた友情に失望し、独

り夜汽車に乗って故郷へと帰った。彼は汽車の中で独白する。
『結局、最も出世しなかったのは自分だったが、一番幸せなのは自分かもしれない。心にはまだ理想があるし、叶わない夢であってもまだ夢がある。家に帰れば、最愛の初枝が待っている。原稿持参も彼女が勧めてくれたことだ。彼女だけが自分のことを本気で心配してくれる。今回文壇デビューは叶わなかったが、事情を話せば彼女はきっとわかってくれるし、慰めてもくれる。早く帰って初枝の顔を見たい』
そう思うと気持ちがはやった。汽車の動きが遅く感じられた。ようやく家に着いたとき、何故か、いつもと違う違和感がある。どうしたことか深夜にも拘わらず煌々と明かりがついていたのだ。胸騒ぎがした。
玄関に入ったとき、突然、初枝の妹が飛び出してきた。目にはいっぱい涙を溜め、鈴木にすがりついてこういった。
「お兄さん、大変なことになったの。お姉さんが死んだの」
アッと思った。一瞬、めまいに襲われた。
悲嘆にくれ、号泣する義妹を見て呆然とした鈴木は、ともかくも家の中に入る。そして徐々に明らかになったのは驚愕の事実だった。
鈴木が東京に出かけている間に、初枝のもとにある男が訪ねてきた。安さんといって、曳馬の分家の当主だった。どこでどう知ったのか、初枝が鈴木の妻となっていることがわかって訪ねてきたのだ。安さんは初枝にいった。
「武人は生きているよ。今弟夫婦の下で療養している。武人は戦争で大きな怪我をして半身不随になり、寝たきりの生活を余儀なくされているが考えることは出来る。戦死公報が回ったが、それは間違いだったのだよ」
曳馬武人は生きていたのだ。弟夫婦の厄介者になりながら、半身不随のただ呼吸をするだけの廃人になっていたが、それでも生きていた。弟夫婦やその息子に死ぬことを期待されるような哀れな存在になっていたが、それでも生きていた。
初枝は自分を恥じた。自分は何という間違いを犯したことだろう。自分は鈴木さんの妻になるべきではなかった。彼女は絶望し、そして首を吊った。
私はこの小説を読んで時間の残酷さを思った。時間はすべてを変質させる。友情も例外ではない。あれほど理想に燃え、生き生きと躍動していた精神が生きる現実、生活の前にその

価値を毀損し、結果、友情は無残にも瓦解した。

私はもともと友情を極めて不確かなものと考えていた。二人またはそれ以上の人間が同じ方向を向いているときは成立しやすいが、年齢とともに、次第に理想よりも現実の生活が優先されると、そのときに置かれた社会的ポジションや生活環境によって友情は大きく変質する。場合によって友情どころではないこともある。そうでなくても、元来、永続する友情は少ない。この小説のように一緒にいることが苦痛に感じることすらある。自分の心が汚染される危険を感じたなら、そんな友情を無理に続ける必要はない。

それでも友情に変質をきたさず、お互いの努力によって稀にそのまま関係が維持されることがある。それは幸運なことで、そういう友情は大切にすべきだ。

愛も変質する。かつて燃えるような愛を交わした仲であっても生きることを優先すれば、打算から簡単に愛を捨てる人もいる。一方、初枝のように一度捧げた愛に殉じる女性もいる。そこまで愛された曳馬は幸福であったかもしれないが、安さんの出現によって突然の不幸に見舞われた鈴木はあまりに悲惨な境遇に突き落とされた。

この不幸からいえること、それは人生が理不尽そのものであるということ。それに必死に耐え、生きて行かなければならないのが人生だ。一生を通じて何事もなく、順風満帆に世間を渡れることは絶対にない。作者はこの厳然たる事実を改めて私に示してくれた。

最後に、小説のもうひとつの主題を戦争の残酷さといっておきたい。戦争はまったく無益で全てを破壊してしまう悪魔的存在だ。この小説では直接触れられていないが、六人が堕落したもうひとつの原因は、世間を包む戦前・戦中の価値観と戦後の価値観の大逆転だ。生きる目標さえも見失わせるほどの大きな変化だった。

そして曳馬と初枝の悲劇。これほどまでに戦争が悲惨であるにも拘わらず、愚かな人間は戦争を繰り返す。神から利己心と闘争心を植え付けられた悲劇なのだろう。

（了）

この前・この間（中編）

いんば華子

佐伯先生への焼香を終えて式場の入り口が並ぶロビーへと出た。その日は、三つある式場すべてでお通夜が行われていて、それぞれの受付前に置かれたソファーには、老人たちが疲れた様子で腰を沈めていた。佐伯先生の一般参列者は建物のキャパシティを超えていた。葬儀業者によって入り口で四列に並ばされ、それは外の駐車場まで続いていた。

先生の焼香に並ぶ人々が、若すぎる、早すぎる死だと、口にせざるを得ないほど気の毒な死だった。

人で溢れたロビーには、いくつか人の輪ができていて、その一つに訃報を知らせてくれた鈴木優弥（すずきゆうや）の姿があった。背が頭一つ分高くて肩幅があり、いかにもスポーツマンという体つきをしている。優弥がこちらに気づいて片手を挙げたので、近づいて礼を言った。

「久しぶりだな。連絡くれてありがとう」

優弥は垂れ目を細めて笑った。昔から変わらない、力の抜けるような笑顔だ。

「びっくり……したよな。くも膜下出血だったんだよ。なんの前兆もなくて、先生も家族も気が付かなかった」

優弥は簡単に死因を説明した。部活の顧問で現在は同僚となると、はじめて聞いた時のショックは相当であっただろう。同時に職場や俺たちのような部活関係者に連絡を取るなどして、慌ただしくしていただろう。なんとなく落ち着いているように見えるのは、一通り終えられることの安心から来るのかもしれない。

優弥の周りには、成人式や中学校卒業式の面影を残すクラスメイト、地元に残っていて、時々見かける先輩や後輩がいた。再度周りを見渡して、佐伯先生に部活を見てもらっていた世代の集団だと気づいた。

「なあ、来週末お前の店予約取れないかな。そうだな……ここにいる二十人くらいで」

「来週？」

「ここまで車のやつも多いから、来週改めて集まろうかと思ってさ」

「わかった。親父に他に宴会が入っていないか聞いておくよ。俺の記憶だと、何もないから通常営業の予定だったんだけど」

「悪いな。迷惑かける。先輩が多いとやりづらいから、俺らとその下中心で、声をかけようと思っている」

ポンと優弥に背中を叩かれる。昔、試合中のコートの中でもこんなことが何度かあった。優弥はこの手で、今はバスケットボール部の顧問をしている。そう考えると、触れられた温かさが、背中を伝って胸の中に広がるような気がした。

「ところでここまでは翼も車で来たんだろう？　俺は職場の何人か乗り合いで来たんだけど。学校関係者って、多すぎて駐車場溢れるって聞いていたから」

「俺も、近所だから紅美（くみ）を乗せて来たんだ。一緒に焼香したはずなんだけど……」

俺はあたりを見回した。途絶えることのない焼香客が次々と真横を流れていく。ロビーにはどんどん人が溢れてきて、隣の式場の客か見分けがつかない。年齢の違いはあれど、黒づくめの喪服を着た人々で埋め尽くされている。

人の中で、誰かを探すように周囲を見渡している人がいた。紅美だった。

俺は、優弥の側を離れて紅美を呼び止めに行った。少し大きな声を出せば気づかせることもできたが、場にそぐわないと思いできるだけ近づくことにした。

「紅美、だれか探しているのか？」
「わっ。びっくりさせないで」
身体をびくりとさせた後も、紅美は人探しをやめなかった。俺を、帰りの足を探しているわけではなかった。
「紅美のクラスの人たちには会えたのか」
「うん。また今度集まろうって。今日はそれでおしまい」
せっかくの気遣いにも、心ここにあらずの返事だ。
「誰か探しているのか？」
紅美は、黙ったままロビーの端を指さした。横長のロビー奥に設置された三人掛けソファーには、骨ばった背中を丸めた若い男が一人座っていた。席を求める人は多いだろうに、周りの誰もその隣に座ろうとはしなかった。
言葉に出さずとも、俺たち二人には、その男が伊藤なのではないかと確信に近いものがあった。
「よう。紅美。久しぶり」
紅美の指さす方向に集中していて、優弥が近づいてきたことに気が付かなかった。今度は二人同時にびくりと驚いてしまった。
「急に驚かすなよ」
「こっちのセリフだよ。傷つくなあ。なに、珍しいやつでも見つけたの」
優弥は俺たちの顔を交互に覗き込んだ。優弥と目を合わせた隙に、そのソファーから伊藤らしき人物は消えていた。紅美も移動の瞬間は見えなかった。早速紅美が、伊藤君がいたと言い出すかと思ったが、何も言わなかった。俺もわざわざ言うまでもないと思い、優弥には、知っている人かと思ったら見間違いだったと説明した。
人が集まる日には、本来の目的から外れて、誰もが自分のためのノスタルジックなものを探し出してしまう。それがどんな人であれ、どんな思い出であれ、過去がある限り止められないのだ。

優弥や当時の部活のメンバーと別れ、俺は紅美と車に乗った。時間のかかった焼香と立ち話で、すっかり日は暮れて、敷地内の街灯が煌々と一帯を照らしていた。焼香客はいまだに絶えず、会場の外に列を成し続けている。お通夜が始まる

前から車を誘導していた外の警備員たちは、疲れた顔をしていた。
「伊藤君も来ていたんだね」
紅美は斎場の敷地を出たところで話しかけてきた。見かけた男は、伊藤であると結論付けた。
「まあ、たぶんだろう。三年の時伊藤は佐伯先生のクラスだったから恩師のお通夜くらいには、行くんじゃないのか」
「どんな気持ちで、来たんだろう。佐伯先生、三年間私たちの学年担当だったから、伊藤君のこと、ずっと気にかけていたわ」
「そうだろうな。……中学始まって数か月で、ヘビーな学年集会だったもんな」
中学生活がスタートしてすぐの六月、あることがきっかけで学年集会が開かれた。通常は時間割や学校のスケジュールで時々開かれていた学年集会だが、その二回目ですでに佳境にあった。一学年三クラスしかないので、伊藤奏太（いとうそうた）という存在は知れ渡り、ここ数日欠席が続いていることも噂になっていた。
この時には、伊藤がとてつもなく辛く救いようのない三年間を送ることが決定的になっていて、入学早々に転んだ人間の末路というのを、ここで目の当たりにした。
事の発端は、四月。もう伊藤のクラスの中で始まっていた。
市町村合併の話すら持ち上がっていなかった当時、村の中には中学校が一つ、村内三つの小学校から子供が集まっていた。誰もが手探り状態でクラスの新しい友達を作ろうとする中、伊藤は、元来おとなしい性格らしく、誰とも話そうとしなかった。あがり症もあり、話しかけられている姿を見かけると、大体顔を真っ赤にして視線の先が定まっていなかった。
子供は、普通と違うことに敏感だ。これだけなら揶揄われる程度だったかもしれない。しかし、見つかった相手が悪かったのだろう。いや、必ず他の、他人を食い物にする相手に見つかっていただろう。
俺は、伊藤についてはまた聞きのまた聞きで、噂として聞いただけだった。
伊藤が落ち着きのない様子でクラスの男子と話をしているところ、学年で幅を利かせ始めた清水という男子生徒が、取り巻きと一緒に声をかけた。

「お前、なんで顔赤くしてんの」
廊下中に響いたらしいその声は、多くの目撃者を作った。移動教室もある休み時間、トイレの前、クラス関係なく生徒が行き交っていた。
伊藤は答えなかった。答えることができなかった、の方が正しいのだろう。
「それって、男が好きなんだろ。全然女子と話さないもんな。やっぱりホモ？」
嫌らしい笑みを浮かべた清水に続き、取り巻きも大声をあげて笑った。彼らにとって、体のいいおもちゃができた瞬間だった。けれどもこの展開には、話し相手も黙っていられなかった。その時話していたクラスの男子は、学年トップの秀才であることに加え、容姿端麗な小川だった。猫背と挙動不審が板につき始めていた伊藤とは、学校の中では生きる世界が違う人間だった。
「やめろよ。ホモなんていうわけないだろう。ねえ、伊藤君」
小川は、清水たちを優しく諌めて、うつむいた伊藤の顔を覗き込んだ。
「……ねえ、伊藤君？」
伊藤は何も言わなかった。小川の表情も次第に曇り、そのあとを救う言葉を持たなかった。
一部始終を目撃した人により、少しずつ『伊藤はホモだ』という噂が、男子生徒を中心に広まり始めた。はじめは、小川もセットに噂されていたが、学年トップの成績や彼女ができたことで、いつの間にかきっかけの場にいたことも忘れ去られた。小川は、自分らしくいることで、トラブルをはねのけていたことさえ、気が付かなかっただろう。元々、そういうこととは縁遠いタイプなのだ。一方で伊藤の噂は膨れ上がった。周りの反応は、陰口に始まり、バイ菌扱い、無視、学校の中には伊藤を孤立させる方法がいくつもあった。
六月の学年集会のきっかけとなったのが、伊藤いじめのピークが来たからだ。先生の見えないところでゲームに興じるようにしていたって、子供の隠し事は大体大人に筒抜けだ。絶対にわからないという独りよがりな自信で、限度がわからなくなっているのだ。だから、大事になって露呈する。注目を集めるような派手なパフォーマンスをしたいとでも思ったのだろう。いじめの中心になっていたグループの一人が、掃除の時間にバケツに入った水を、伊藤の頭から被せたのだ。

水を被せた生徒と伊藤の親は、教頭や校長も含めて面談を行ったらしい。どれも噂で流れてきた情報に過ぎないが、直近の学年集会でいじめについての長い講義が行われた時、俺はすべての噂を信じた。

集会では教科書を音読したような道徳的なことが延々と説明された後、クラスや部活、学年で、困っている人や悩んでいる人がいたら積極的に声をかけて、元気で明るい学校生活を送りましょうという定番の文句で締めくくられた。学年のほとんどが、伊藤の名前を頭に浮かべながら聞いていただろう。うちの学年でいうと、あれがいじめなんだという具体的な事例と一緒に。

集会の時自分が座っていた席から、僅かに伊藤の姿が見えたことを覚えている。バケツの件から欠席が続いていたはずなのに、この日ばかりは登校していた。俺のことじゃないから、集会に出ることは苦痛でもないとアピールしているつもりなのだろうか。学年中が知っているのに律義に学年集会に出席するなど、余程のバカなのだろうと俺は結論付けた。

クラスが違うこともあって、伊藤のことは、所詮他人事だった。俺には長かった学年集会の疲ればかりが残り、いわゆる「同情」、いじめられる側の感情を伊藤を通してみようとする気持ちは、起こらなかった。

紅美は伊藤の話を続けた。

「伊藤君、結局三年間報われなかったって言ったらいいのかな。先生たちは集会をやってあの問題は終わったことにしたかったんだろうけど、むしろあれが始まりだったんじゃないかって。あの後、さすがにまたバケツの水を被せることはなかったけど……」

初期から繰り返されている陰口や無視は途絶えることはなく、音もなくじわじわと、それでもはっきりとした形があるのではないかと思わせる暗黙のルールが、俺たちの学年にあった。伊藤は学年集会の後も物理的に距離を置かれ、プリントの配布の流れは伊藤の手前で止まった。グループ学習の輪に入れようとする人はなく、社会科の授業でも、体育の授業でも、伊藤は一人余っていた。

「ふと当時のことを思い出すことってあるじゃない？　今更になって、罪の意識みたいなやつ、感じることってない？　あの時少しでも、私に勇気があって、男女も関係なく、『伊藤君、一緒に課題やろうか』でも、『クラスのみんなもそんなバ

カみたいなこと、やめなさいよ』って言えたらって、思うことはない？」
「……お前、そんなさ、『当時こんな風にできればよかったと思っています』とか、平気で俺とか他人に言えるような、ちょっとでも伊藤みたいなやつに同情できるタイプなの？」
自分の口から発した言葉が、氷のように冷たかった。言った後は手遅れで、紅美は明らかに反応に困っていた。
「え？　あ、えっと、当時もっと自分がしっかりした人間だったら言えたかもってことなんだけど……」
「……お前には言えないよ。どうしたって無理だ。あの学年の空気に誰も逆らおうとしなかっただろ。無難な中学校生活を送れたのは、黙って静かにしていたからだよ。それがわかっていたから誰も何も言わなかったんだ」
冷たく言い放ってしまったことは失敗したと感じたが、次には、苦手にしている紅美を困らせてやろうという憂さ晴らしに変わっていた。自分の子供っぽさに嫌気がさすが、こういうときでないと、俺には言えない。勢いに乗って次々言葉が出てくる。
「こんなこと言えたらよかったなんて、当時の感情や記憶を塗り替えるようなこと言うなよ。同情する奴なんて昔も今も、誰もいないだろう」
たまっていたことが言い終わると、ちょうど紅美の家の前に着いた。昔からのコメ農家らしい、玄関前の庭が広くなっている一軒家だ。
「ほら着いた」
十分なほど悪い雰囲気が出来上がった。またしばらく直接は会わないだろう。会うときには、一緒にお通夜に行ったけれど、イライラして帰った記憶はあいまいで、原因は思い出せない。近所であろうと、俺たちの世代は生活のサイクルが違えば滅多に顔を合わせることはない。
「どうもありがとう」
すべて言い終わる前に、力強く助手席のドアが閉められた。家に入る影が見えたところで、自宅に続く田んぼ道に向かいハンドルを切った。
両側を用水路が走る道は、街灯や車のライトがあっても、二十メートル先が見えない。
紅美を怒らせることに成功した達成感は、発車と共に手元を離れていった。気づけば罪悪感だけを引き摺りながら、暗

闇を走っていた。

バスケ部の飲み会は、週末の土曜日夕方六時から行われた。四時から親父と厨房でつまみの仕込みを始めた。土曜の夕方である程度の集客が見込まれたが、親父は、そういうことならと二つ返事で貸し切りの許可をくれた。サービスだと言って、メニューにないものも作れるよう材料をそろえた。

当たり前のように、揚げ物中心でいこうとする親父を止めた。いつまでも子供は子供だと思っている節がある。アラサーの男が二十人集まるのだ。揚げ物で胃もたれを起こすやつも何人かいる。アルコール類も先日多めに発注し、とりあえず今日のうちになくなってしまうことはない。

食材を切って下準備を始めて少し経った頃、店の入り口の引戸が開けられた。

「珍しいな。どうしたんだこんな時間から？」

現れたのは紅美の父親だった。俺の親父よりもまだ寂しくない髪に、ひょろりと細い体が特徴だ。親父よりも二つ年上で、兄弟のように育ってきた仲だ。長年の農作業で、身体や顔にはシミが点在し、色濃く日焼けしている。今も畑か田んぼからの帰りだろう。店を休んでいる時間に電気が点いていて、気になって扉を開けたというところだ。

「今日、翼の昔の同級生が集まるんだと。中学のバスケ部だったか？」

「ああ」

俺は包丁を持つ手を止めずに答えた。

「そうか。いいなあ。俺らの年になるともう集まることもないもんな」

「俺も久しぶりです。先週の先生のお通夜で、集まろうかって話になったんです」

「ああ、ありがとうな。うちの紅美一緒に連れて行ってもらっちゃって」

「いえ。大したことじゃないです。いつもお世話になっているんで」

「そういえば……あれ聞いたか？」

「何ですか？」

「あの、伊藤奏太だったかな」

意外な名前が出され、包丁を持つ手が止まってしまった。先週の通夜の間中、会話について回った伊藤奏太だ。その扱い方が、俺も紅美もよくなくて、結果的に雰囲気を壊したのだけれど、親父さんはその日のことで何か紅美から聞いたのかもしれない。

「行方不明らしいよ」

「え……？」

「伊藤君って、うちの翼や紅美ちゃんと幼稚園から一緒だった子か？」

「いや、違い違う。学区は中学から一緒になっているはずだ。うちの親戚の親戚から伊藤の家に嫁に行っているのがいて、や、その家に嫁に行っているんじゃないんだけど、この前法事があった時に教えてもらってさあ」

田舎の繋がりとは時々恐ろしい。辿れば世界が向こう三軒両隣で説明がついてしまうような気さえする。それよりも、伊藤が行方不明というのは本当なのだろうか？　いつからなのだろう。先週、佐伯先生のお通夜で見た伊藤らしき人物は、伊藤ではなかったのか？

「行方不明……とは？　いったいどういうことなんですか」

「伊藤さんのうち、配管工事の請負とかメンテナンスやって、まあそのせがれはそれ手伝ったり手伝わなかったり、あと近隣の知り合いの会社で働いたりしていたらしいんだけど、二週間くらい前から家に帰ってこなくなったらしくてね」

二週間前は、先生の訃報があった頃だ。辻褄の合い方に、妙なざわめきを感じる。

「帰る家ったって実家しかないし、友達とか女がいるわけでもないそうだから、家族が警察に届け出たんだよ」

「ああ、そうか。なんかの事件に巻き込まれてなければいいけどなあ。お前も心配だろう。中学の同級生なんだから」

「あ、ああ。でもあまり接点なかったから、よく思い出せないんだけど」

「紅美も同じようなことを言っていたよ。伊藤の親戚の方では、ちょっと子供の時から変わった子だって有名だったらしいよ。中学の時、学校に行けなくなる病気だかなんだかで、しばらく休んでいたらしくてさ。高校受験も、勉強は追いつかないし、やっと入ったところも合わない学校でまた通学拒否。いやぁ、やっぱり若いときにうまくいかないと、その後もうまいようにいかないもんだなぁ」

親父さんの言葉を聞いた瞬間、身体が宙に浮かぶほどの激しい情動が突き上げてきた。

『若いときにうまくいくなんてことが、あるものか』

紅美の親父さんの言葉に、怒りが生まれた。自分ではなく、伊藤のことを言っているのに。

感情に遅れて、これは自分のことではないと理性が追いついてきたとき、立ち眩みのときみたいに頭に上った血が一気に体に戻った。その隙を見つけたとばかりに、店の振り子時計が時を知らせ、鐘の音が頭の中で反響した。

「おう。そろそろ行かねえと。邪魔したな」

紅美の父親は、片手を挙げて挨拶をすると、店から出ていった。うちの親父は日常の一コマを終え、宴会の準備をするという今日の仕事に戻っていた。親父にとっては、なんてことのないただの世間話なのだ。

『中学の同級生なら心配だろう』とは決まった会話のパターンだ。『若いときにうまくいかないと、その後もうまくいかない』と言われて、自分の一人息子が借金抱えて帰ってきたことじゃないかと勘繰ったりしないのだろうか。もちろん紅美の親父さんが俺たち親子をバカにしたくて言ったのではない。そんな風に察せられる場合もあるということに、紅美の親父さんも、俺の親父も反応しないのだ。幼馴染の親戚の親戚で起こったという不幸話も、仕込みをして調理して、会計をしたら片付ける。そんな一連の枠の中に組み込まれている。

親父は丸めた背中を向けたまま、業務用の冷蔵庫から取り出した鶏肉や野菜を、調理台に並べていった。

バスケ部の飲み会は今回が初めてではない。メンバーが入れ替わりながら同学年中心に行ってはいたが、二十人、しかも前後の学年も集まるとなると、メンバーの期待値も違った。

店の入り口を開けて一人増えるだけで「ウェーイ」という低音の歓声があげられ、すでに到着している面々から質問攻めにあっていた。現在の仕事や家族のこと、そして中学からの進学先のこと。人の数だけ話題があった。

「翼、大体集まったから始めよう」

共同幹事を名乗り出ていた優弥が、調理場のカウンターに

出しておいた瓶ビールを運び始めた。調理場と続いているテーブル席では足りないので、店の奥の小上がり四卓すべてを使っている。

「枝豆ならすぐでるから。あと揚げ物も持っていく」

親父は下準備と冷蔵庫に入れておけるものを準備した後、優弥たち数人に挨拶を済ませ自宅に戻った。水入らずで過ごせということなのだろうけど、俺は調理場でビールを飲むことになるだろう。

中学のバスケ部メンバーで集まると、決まって一学年下の坂下の話題になった。今日も早速始まったらしく、笑い声の合間に「坂下」という言葉が入っている。

坂下は、バスケ部に所属するも、ほとんど補欠かマネージャー並みの仕事をあてられていたお荷物部員だった。大体はコートの隅でひたすらにボール拾いをしていた。運動神経がいいとも言えずなぜかバスケ部に所属していた。物言いもはっきりしていなかったので、伊藤に似ているところもあった。部の中では当然のようにパシリにされ、学年が上がっても変わらなかった。高校の途中には、携帯電話の番号もメールアドレスも変わっていて、連絡をつけられなくなってしまった。先生が亡くなったことは、自宅に電話して坂下の母親に伝えたが、お通夜に姿は見せなかった。

その坂下に特別あたりが強かったのが、今日の飲み会を一番に勢いつけているだろう、橋本だ。小上がりの方からは橋本の声がよく聞こえてくる。

「俺の下に異動してきた後輩がさ、本当に信じらんねえの。入ってすぐの新人じゃないんだよ。お前去年まで何やってきたのって、係長も課長も頭抱えちゃってさ。そいつのすぐ上が俺なんだよ。マジだよ。あの坂下より使えねえよ」

「坂下懐かしい。あいつ何してんの？」

「知らない。飲み会来たことないもんな」

坂下の現在を、ここにいるメンバーは知らないらしい。同じ高校に進学したメンバーの心当たりはないし、連絡を取り合っていた様子もない。

橋本は、大学卒業後近隣の市役所に就職したと聞いていた。俺の所には、どこの市役所かまでは話が来ていなかったが、会話を聞いていると、一通りの現状は説明したようだ。

「坂下はさ、まだボール拾いできたじゃん。今だから言うけど、当時、坂下には悪かったと思ってる。だってあいつボー

ル拾いをちゃんとやってたよ。できてたじゃん。坂下レベルは、まだ我慢しなきゃいけない範囲だったんだよ。あいつはまだ付き合っていけるレベル。……今思えばさぁ、なんであんなに目の敵にしちゃってたのかわかんないんだよなぁ」

橋本は酔って呂律が回らなくなることもありながら、勢いのまま話した。料理を運んだ時に見た橋本は、顔を赤くしてどんな話も満面の笑みで騒ぎ立てた。他のメンバーは料理を出すことに徹している俺に気を使って、うまいと言って出したつまみを食べた。坂下と同じ一学年下のメンバーは、俺も運びますと皿を持ってくれた。

俺が空いた皿と一緒に厨房へ持ち帰ったのは、橋本の「わからない」に付き合わされた坂下は、ここにはいないという事実だ。橋本は、職について、不満がありながらも酒を飲んで笑って人に囲まれている。

食事やアルコールのスピードが緩やかになった頃、俺もやっと厨房を離れ小上がりに座った。俺のグラスにどんどんビールが注がれた。

坂下をはじめ、話の肴になるのは、今ここにいない人間だ。今日来ていないうちの同学年の一人は、職場の労働組合運動に力を入れているらしく、地元にいながらも全く疎遠になってしまった。他にも、上京後の足取りが掴めなかったり、地方で就職した後帰ってきていなかったり、人脈で辿れない人が何人かいることが分かった。

形ばかりのラストオーダーを取ろうと、酒の在庫を確認しに厨房に戻ると、優弥が後からついてきた。

「難しい顔しているぞ」

「え？　なんだって？」

「坂下の話があってからだよ」

「ああ。そんなに顔に出てる？」

優弥は大きくうなづいた。

「昔から変わんないな。翼はそういうこと、結構気になるんだよな」

「気にしないように……しているんだけどな」

これは自分の『弱点』とでも言えるのだろうか。他人を貶める行為が嫌いだ。気分を悪くするのはみな同じだろうが、

俺の場合は、それが極端だ。自分のことでもないのに、一緒に傷ついてしまったり、憤慨してしまったり、忙しいのだ。伊藤のことも、当時は全然気になっていなかった。そのはずが、今でもあの学年集会で見た後ろ姿が忘れられないでいる。俺の弱点に、優弥は部活の時から気づいていた。今は立派な中学校の先生という優弥は、根っからの先生気質なのかもしれない。

「鈴木先生様様だな。生徒からの信頼が厚そうだ」

「いや。まだまだですよ。このガキって思っちゃうこともあるしね。それに、今だからわかる佐伯先生のすばらしさってのもある」

「佐伯先生の？」

優弥は恩師で同僚の佐伯先生を失っている。バスケ部の飲み会は盛り上がっていたが、肝心な佐伯先生のことについては、あまり話してはいなかった。優弥がいることから、かえってみんな気を使ったのかもしれない。優弥は、穏やかに笑いながら続けた。

「佐伯先生はさ、俺たちをいつかは大人になるガキとして扱ってくれていたよ。今の俺になるまでを見ていた。人としての才能だったと思うよ。ある意味、最強の教師だね」

「優弥が教師になるって見抜いていたの？」

「いや。そうじゃないんだけど、バスケで失敗した時も、テスト勉強頑張っている時も、どんなことも先に繋がっているっていう態度でいてくれたんだ。結果がどうであろうと『失態を責める』ってことをしない人だった。中学生のガキ相手に、自分と同じくらい人生経験積んだ相手みたいに接してくれていたよ」

「……そうか。俺は、優弥の話聞いてもピンとこない。でも佐伯先生だから、きっとみんなにも同じだっただろう」

「翼は、そうだなぁ。もうガキもつけられないくらい、大人だったんじゃない。橋本タイプの方がバスケ部は多かったから尚更だろう。でも案外メンタル弱いから、試合の時の使い方には困っていたみたいだけど」

「うるせえよ」

俺もまだ、中学時代の佐伯先生を思い出し切れていなかった。優弥の話の通りだとしたら、佐伯先生は、俺をどう見ていたのだろう。今ここで、家を継いで働いている姿を見出し

ていたのだろうか。
「伊藤、やっぱり見つからないらしいよ」
小上がりから橋本の声が聞こえた。話題はいよいよ伊藤についてだ。伊藤の近所に住む後輩に質問が飛ぶが、事の動きは知らない。未だに行方不明ということだけだ。
「佐伯先生は、卒業の年伊藤の担任だったよな」
優弥はうなづいた。
「……職場一緒になった時佐伯先生言ってたんだけど、卒業してからも、度々伊藤とは会っていたそうだよ。一年の時いじめがあって、それから何もなかったみたいに、なんて普通に考えて無理だろ。でも、いい意味でも悪い意味でも子供は嘘をつくから、実際、伊藤が抱えているものを見抜けない先生も多かったと思うよ。ガキだった俺たちは、結構複雑な感情を持っていて、しかもその感情は、大人が思っているより成熟しているんだよな」
そのことは、自分も自覚している。だから、余計なトラブルを避けるために、周りとうまくやっていくために、空気を壊したり、逆らったりすることをしないのだ。
「でも佐伯先生は、自分自身の中学時代のことも覚えていたから。だから、他の先生と違うって思ったのかもなあ。なあ翼、俺、教師になってから佐伯先生と本当にいろんなことを話したんだぜ」
「……うん」
恩師を失うことの大きさを、俺はここでまた目の当たりにした。向こうで騒いでいるメンバーの中にも、少なからず佐伯先生の影響を受けて、心のどこかでは悲しみに暮れている人もいるのだろう。親交が深いほど喪失感は大きい。俺が思い浮かぶ中で優弥と、きっと伊藤が一番この悲しみにくれているだろうと思う。
「翼、俺、向こう行ってラストオーダー取って来るよ。こっち片付けもあるだろ」
「悪い。ありがとう。ちょっとここ離れて、店の裏に空き瓶とか片付けてくる」
厨房の奥には、外に通じる勝手口がある。厨房はお世辞にも広くはなく、ものを置くスペースが限られている。ごみや空き瓶をひとまずは勝手口から店の裏に出している。店前の駐車場から続くコンクリートでおおわれているので、何を置くのも気にしなくていい。店の入り口からは見えないので、

ある程度ものをためておいて、回収を頼んでいる。
厨房の移動を妨げていた空き瓶のケースを持ち上げて、勝手口を開け、ストッパーで支えておいた。店の外は暗く、勝手口の明かりが頼りだ。近くの田んぼの方からは、たくさんのカエルの鳴き声がする。
業務用の生ごみ箱の隣に、空き瓶ケースを下すと、暗闇で何かが動いた。足元には、下準備の時に捨てた生ごみが、いくつか散乱していた。視線を上にあげると、店の壁にくっついてしゃがみ込み、震えている影があった。
「なあ、冷蔵庫の瓶ビール持ってっていい？」
店の中から、優弥が叫んだ。
「ああ、大丈夫だ」
向こうからここは見えない。だから、俺が何を見てしまったのかもわからない。
ほんの一瞬の判断だった。なぜだろうか。でもこの時、俺は一つの方法しか思いつかなかった。
「こっちに来い」
掴んだ腕は細く、肘の下のところで自分の手が一周してしまった。手前に引くと、すぐに体が浮いた。勝手口を閉めたら、すぐに厨房奥のくぼんだスペースにそれを押し込んだ。この場所は、店の中からは見えない。ひとまずは水と食料だと思い、ミネラルウォーター一本と自分が厨房でつまんでいた料理の残りを渡した。おそらく、こいつは裏の生ごみをあさっていたのだろう。
「絶対に、ここを動くな。客が帰るまで、音を立てるなよ」
厨房の電気が、引き込んだ男の影を写し出す。長く伸びた前髪で、顔はよく見えなかった。灰色の汚れたジャージとTシャツ姿で、どう見ても店の中に引き摺りこんではいけない外見をしている。その男は、伊藤は、震えたまま全身で頷いた。
この時の俺が何者に見えていたのかはわからない。発見者なのか、昔のクラスメイトなのか、食料を恵んだ聖人君主なのか。
俺は、伊藤を見つけたことで、一つの自由を手に入れたような気がした。一人の人間を扱う自由を。これ以上ない弱者になり果てた伊藤だから、俺は引き込んだのだ。
俺は店内にいた誰にも、優弥にさえも、伊藤を発見して厨房の奥で座り込んでいることを教えなかった。

宿場町と共に消ゆ　―第３回―

香取　淳

四、

目覚めると、キヨシは硬い畳の上に両手を投げ出して寝ていた。天井から吊り下げられた蛍光灯の光がやけに眩しい。渋い目で腕時計を見ると午前一時。どうやら家庭教師のアルバイトから帰ってきた格好のまま眠り込んだようである。何故か分からないが、涙で頬が濡れている。そして、胸の真ん中にポカンと空いた黒い穴。

新天地にやってきてずいぶん時間が経つが、彼は果てしなく空虚で悲しい感覚に何度も何度も襲われる。そしてその度に、陰湿な自分は何一つ変わってはいない、人前で目いっぱい元気に振る舞い快活な青年の真似をしたところで、人の本質はそう簡単に変わるものではない……ということを思い知らされた。それでも彼は、「何時かきっと明るい自分に生まれ変わる」という希望を捨てずに、勉学や部活のラグビーなどに懸命に打ち込んだ。

彼の望みが叶えられたのは思いもよらないことがきっかけになった。それは、九月から始めた家庭教師のアルバイトである。

生徒は小柄で目がぱっちりした娘で、母親が「中学生とよく間違えられる」というように年齢よりずっと幼く見えた。そのキヨシより一つ年下の生徒は、彼が化学の教科書を開いても興味を示さない。やる気がまったくないのである。

そこで彼は、教科書を閉じて彼女の考えを聞いてみた。すると彼女は、東京に行って美術の勉強がしたい、将来はデザイナーか美術関係の仕事に就きたいと言う。しかし、彼女の両親が首を縦に振らなかった。キヨシが最初に訪問した時、生徒の母は「このように幼い娘を一人で東京に出すことはできません。だから系列の短大に進ませて、将来、良い奥さんになれるように……」と話していたことを思い出す。

キヨシは、個人的には生徒の夢を実現させてやりたいと思った。しかし、彼女の母親との約束を果たさなければならない。彼は、当初の方針を変えて大学生活の楽しいことをあれこれと話していく。例えば部活の楽しさ。彼自身はラグビーのジャージに着替えてグランドを目いっぱい走る。ほかの友はテニスやコーラス、中には社交ダンスのサークルに入った友もいる。とりわけ薬学のクラスは男女がほぼ半々なので、コンパはほぼ毎月行い、時折開催される学部単位のダンスパーティにも仲間と誘い合って出掛ける。

そのような授業を繰り返すうちに生徒の表情が変わってくる。家庭教師の来訪を心から待ち望み、キヨシから聞く話への期待が明確に読み取れた。すかさず彼は、「楽しい大学も推薦がなければ入れないが、君の場合は化学だよね」と示唆する。彼女が頷くのを見計らい、おもむろに化学の教科書を開いて要点を教える。生徒から最初の拒絶や苛立ちが消え、懸命に理解しようとする気持ちが伝わってきた。

瞬く間に二ヶ月が過ぎ、中間テストの成績が発表になった。彼女の化学の成績はかなり向上して、学年の平均点を上回った。キヨシは一ヶ月と少しでこの成績が取れるのであれば、まだまだ伸びると確信して週に二回のバイトに力を注いだ。しかし、放課後にグランドを目いっぱい走り、汗が乾く間もなく下宿に飛び帰る。そして、熱い夕飯を数分で掻き込み、息をつく間もなくバスに飛び乗る。およそ三十分間バスに揺られて生徒の家に着くとすぐに授業。生徒の理解も日増しに進んで、かなり突っ込んだ質問も返っ

てくる。それらの質問に丁寧に答え、大学生活の楽しい話題も欠かさずに付け加える。二時間余りの授業が終わり、下宿に辿り着くのは夜の十時過ぎ。

夕暮れが日一日と早まり、冬至が近づいてきた。彼はアルバイトの最終日を迎え、いつものバスに揺られて生徒の家を訪ねる。その晩は、出迎えた生徒の母親も娘の部屋に入ってきて、娘と並んで座った。キヨシが彼女らの前に落ち着くと、「お陰様で推薦入学が決まりました」と母親が笑顔で言う。もちろん、その脇で生徒も嬉しそう。

「期末テストでね、娘は学年のトップに近い点数を取ったの。学校からは申し分ない成績だって太鼓判を押して貰えたわ。本当に有難う！ あなたのお陰よ」

「いいえ、お嬢さんが頑張ったからです。僕はたいしたことはしていません」

そう答えながら彼は、引き受けた約束を完璧に果たせたことに安堵と深い満足を覚えた。その晩は茶菓でもてなす二人に大学での出来事などを交えながら、キヨシは生徒の進学決定を共に祝う。それらの話題も尽きかけた時、母と娘は姿勢を正して「折り入って、あなたにお願いがありまし」と切り出した。

「お陰様で推薦入学は決まりましたが、娘はまだ幼くて独り立ちできるかどうか、とても不安です。ですからこれからもずっと娘のそばにいて、何かと相談に乗ってくれませんか」

「はい、いいですよ。僕に出来ることであれば何でも……」

キヨシは母と娘に快く答えて、四ヶ月間通い続けた生徒の家を後にする。しかし、彼には生徒と再び会う気持ちはさらさらなかった。「これからも……」と懇願する母娘の前で快諾をしたのは、相手を傷つけないように……という気遣いをしたに過ぎない。

彼は高揚した気分で帰りのバスに乗り込んだが、シートに座ったとたんに吐き気に襲われた。気分が急に悪くなり、鳩尾（みぞおち）あたりが焼けるように苦しい。下宿にたどり着くと下痢も始まり、水便が夜中まで止まらない。数回トイレに駆け込んだ後、気がつくと洗面台の下に横たわっていた。恐らくトイレを出た時に気を失って倒れたのであろう。翌朝、後頭部に手をやると三日月形の瘤（こぶ）が出来ていた。

年末年始の帰省から戻っても彼の吐き気と胃の灼熱感は増すばかりで、普通のご飯が食べられなくなった。医者に診てもらうと診断は『慢性胃炎』。仕方がなく彼は、下宿屋のおばさんに粥(かゆ)を作って貰い、ラグビーの練習も取り止めて病気の療養に努めた。

やがて期末テストが近づき、キョシは試験対策の勉強に取り掛かる。勉強はまったくしていなかったので、進級するためには直前対策が極めて重要になる。その大切なときに珍しい男—それまで殆ど話すことがなかった同級生の三浦—が突然下宿に訪ねて来た。三浦は内向的で口数も少なく、自宅通学とはいうものの両親の家からではないらしい。複雑な家庭環境が推定されるが、キョシも似たような状況にあったので、二人は互いに生まれや育ちについては触れなかった。しかし、三浦は真剣な面持ちで、『生きること』の意味や『死』に対する考えを執拗に問い掛けてくる。それらの問題は、キョシにとっても最大の関心事であったので、二人は夜を徹して話し合い、時の経つのを忘れた。そして、夜明けが近づく頃に疲れ果てて議論が途切れる。登校までにわずかな時間しか残されていないが、それでもキョシはノートを開いて試験に備える。しかし、同級生の三浦はキョシの脇で静かに寝息を立てていた。

試験の二、三日前にやって来た三浦は、結局、期末テストの全日程が終了するまでキョシの部屋で一週間あまり寝起きした。しばらくして試験結果の発表があり、キョシは専門の薬学部に進むことになったが、三浦は留年。キョシは少し後ろめたく感じたが、居候を決め込んだのは三浦の方であり、自分を責めるのは止めようと思った。

正月を過ぎてからは冬ごもりのように下宿の八畳間で思索に耽ることが多くなっていたキョシ。週に二回のアルバイトで胃を壊してしまったが、何故か心の芯には暖かいものが芽生えていた。そこに同級生の三浦が駆け込み寺に飛び込むかのようにやってきた。それも期末テストの直前という、ただならぬ時期に。常軌を逸した彼の行動の裏には、恐らく深刻な事情や精神的な行き詰まりがあったに違いない。その三浦に快く付き合ったキョシの心は、三浦が帰った後も充実した気分で満たされていた。恐らく、夜を徹した三浦との議論は、キョシにとっても有意義なものであっ

たに違いない。
教養部の全日程が終了する頃に、キヨシの慢性胃炎はほとんど癒えていた。吐き気や腹部の熱感が薄れてきたので、彼は粥をやめて普通のご飯を食べてみた。その味が例えようもなくおいしく、食後の吐き気や苦しみも、もう襲ってはこない。「ああ、治ったんだ！」という喜びで、彼は八畳間にじっとしてはいられない。玄関でサンダルを履き、下宿のすぐ前まで迫り出した丘陵の石段を駆け上がる。春の訪れが遅い故郷と違って、丘陵は一面緑に覆われ、水仙やスミレなどが咲き競っている。何より空が青くて、目の前の世界が以前よりずっと広くて明るい。彼は、今まで味わったことのない晴れやかな気分で自室に戻って、再び思索に耽る。
――何故、これまでに経験したことがない新世界、途轍(とてつ)もなく明るくて希望に満ちた光景が目の前に拓けたのか……。
そのきっかけは、アルバイトの最終日に生徒の母親から懇願された「あなたに、これからもずっとそばにいてほしい」という一言。
それまでのキヨシには自分の居場所、安心してくつろげる場所が自分の外だけでなく内側にも存在しなかった。幼い頃からいつ何時、「お前は邪魔！」とか「出ていけ！」という言葉や態度に晒されるか不安で、周囲の大人の顔を窺いながら暮らす毎日。そして、実際にそのような目に遭うと、庇ってくれる人もいなければ逃げる場所もない。ただ、暗がりに閉じ籠って涙が枯れるまで泣くしかなかった。
そのような生い立ちの中で、彼は「この世に存在するに値しない」と自己を否定し、生きることを苦悩としか捉えられない。自ら命を絶つ勇気はないものの、「生きる苦しみから解放される死」を待ち望むようになっていた。その彼に投げかけられた生徒の母の言葉は、キヨシが初めて聞く『自分の存在を肯定する言葉』であり、初めて感じた人の温もりでもあった。
――今までの自分は、他者に愛され可愛がられることばかり求めてきた。しかし、そのような甘えを受け容れてくれる人はこの世に存在しない。もし、他者から認められ大事にされたいと望むなら、他者のためになること、他者に尽くすことである。そうすることにより、自分の存在が認

められ、安心できる場所が見つかる……。
そのことに気づいて、彼は『死を待ち望む心の暗い闇』から解放された。

四月に入り、彼が通うキャンパスは専門の薬学部に移った。一年間通った教養部は、かつて原爆投下の標的にされた兵器工場の跡地にあった。キヨシが入学した時には、原爆の傷跡はすべて取り除かれていたものの、キャンパスの外側にある広い側溝の支柱の一本に兵器工場の名がくっきりと刻まれている。消し忘れたか、それとも誰かが意図的に残したものかは定かでないが、キヨシはその脇を通る度に悲惨な戦禍を乗り越えて現在（いま）の平和があることを強く感じた。

その教養部より数百メートル北側にある薬学部は下宿から歩いて二、三分の位置にあり、通学は一段と便利になった。彼は、さっそく自治会や九薬連（九州薬学生連盟）の委員を引き受け、退部したラグビーの代わりにギタークラブを立ち上げる等の活動に取り掛かる。『人のために役立つこと』が彼の行動力の源であり、周りの人と協力して行う様々な活動がたまらなく楽しい。

瞬く間に一年が過ぎて、五月のゴールデンウィークが近づいてきた。連休を利用して九薬連の定期大会―スポーツや文化サークルの交流会―が毎年開催される。その年は長崎が当番校であったが、先輩の委員は「長崎での開催は不可能」と頑なに拒否。それに対し、キヨシは加盟校としての義務は果たさなくてはならないと主張し、周囲の猛反対を押し切り大会を引き受けた。

彼は手始めに資金不足を補うためのダンスパーティを開催して、かなりの資金を確保する。次に、福岡や熊本からやって来る薬学生のために多くの寺を回って宿舎に本堂を借りる折衝。長崎にはキリスト教の教会やモニュメントが多いが、それ以上に神社仏閣が建てられている。かつて江戸幕府は、この地に勢力を増すキリスト教に対抗して、仏教や神道を推奨したというが、路面電車の終点の正覚寺下から北側の山裾に沿って数えきれないほど多くの寺が軒を並べる。その寺町という地区に足を運んで、彼は一軒一軒を丹念に訪問。大会に必要な数軒の寺の本堂を借りること

に成功した。さらに貸布団の店に出向いて、大量の布団を安価で調達……と身を粉にして働く。

その九薬連の大会を無事に終了させ、疲れ切った体を休めている時に学園紛争が勃発した。キヨシは三年生に進むとき、朝夕二食付きの下宿を出て三畳の間借りに住処を変えている。その入居して間もない大きな建物に、突然二人の同級生が訪ねてきた。家主の妻から大声で呼び起こされ、腕時計を見ると午前六時。目を擦りながら玄関に出ると、狭い三和土（たたき）に二人の女子学生が立っていた。彼女らは憔悴した表情で、髪や服装も普段と違って汚れている。彼が、何か起ったのかと訊く間もなく、二人は掠れた声で叫ぶように言う。

「授業放棄です、すぐに学校に来て下さい！」

彼女らは昨夜から大学本部で学生集会を開いていた。新設される学生会館の管理規約を巡って、以前から大学当局と学生が対立。何度か話し合いの場は持たれたが両者の主張には大きな隔たりがあり、歩み寄りは見られない。そしてついに前日の夕方、大学の評議会は管理規約を強行採決して散会、評議員たちが帰宅しようとしたものの本部を幾重にも取り囲んだ学生たちがそれを許さない。決議の白紙撤回を求めて激しいシュプレヒコールとジグザグデモを繰り返す。

膠着状態が数時間続き、監禁状態に耐えられなくなった評議会は深夜に機動隊の出動を要請。機動隊に守られて大学本部を去っていく学長や評議員を学生たちが激しく非難し、誰もいなくなった大学本部の前で『即日授業放棄』を決議したのだという。

キヨシは、九薬連の大会の準備に精一杯で、学生会館の管理規約をめぐる『学館闘争』には関わってこなかったし、学館問題にも興味がなかった。しかし、大学に機動隊が導入され、警察の権力に守られて学長や評議員が逃げ帰ることは許されることではない。そう思った彼は、「学部全体の学生集会を開いて、即時授業放棄の決定を」という彼女らの要請にその場で同意して足早に学部へと向かった。

授業放棄の闘争に入ると、朝から学生集会が開かれ、討議は延々と夕方まで続いた。時折、大学全体の集会も開かれたが、大半は学部単位で集まり、大学当局の動向や他学

部の状況などが担当の委員から伝えられる。そして、陽が傾く頃に「授業放棄の続行」を全員で確認して散会する。一般の学生たちが帰宅した後は闘争委員会が開かれ、キョシも自治会の委員と共に会議に加わる。最初に闘争本部から戻ってきた委員が大学側の威圧的な対応の詳細や今後の闘争方針などを伝える。それらの情報に基づき、学部としての対応について議論を重ね、翌日の行動計画を綿密に練る。狭い自治会室での会議は深夜におよび、彼は間借りに帰り着くと数時間だけ横になり、翌朝の七時前に再び委員会室に戻ってきた。

学園紛争は長引き、六月を迎える。平日は途切れることなく学生集会が開かれていたが、紛争の初期にはなかった「授業を早く受けたい」という意見がぽつぽつ出始める。それに対して、左翼グループに属する委員たちの説得はイデオロギーが絡んで、かえって反発を招く。同じ委員であっても、キョシの場合には思想的な偏りがなく、純粋に教育の自由や学園の自主独立を訴えていたので、彼に賛同する学生や支持者が増えてくる。そのような経過を経て、学生集会の司会は次第にキョシ一人の役割に固定してきた。

紛争は長引き、一ヶ月が経過した。大学側は紛争直後に首謀学生の退学処分を打ち出し、力で抑えようと試みるが、学生たちは抗議集会や本部を取り囲むジグザグデモで対抗する。その一方で、事態収拾委員会が組織され、キョシは学部代表の学生に選ばれて評議会との話し合いに臨む。時を同じくして、薬学部の学部長が交代となり、キョシが慕っていた『ゴローさん』こと小林五郎教授に変わった。ゴローさんは学館規約の強行採決や機動隊の導入には一切関わってはいないので第三者的な立場で動き始める。感情的になっている学長や他の評議員たちに冷静になることを諭し、力だけでは学生を抑え込むことができないことを強く主張した。

キョシは事態収拾委員会が開かれるたびに小林教授の車で本部の会議室に向かった。その車中で、ゴローさんは学長と学部長からなる評議会は、退学処分にした数名の学生の『再入学』を認める、議決した学館規約の見直しを行う用意もあるようだ……と譲歩案をほのめかす。その示唆を証明するかのように、事態収拾会議が始まると「退学処分の撤回はできないが再入学という方法もある」と話が進ん

でゆく。彼は、ゴローさんが学長や評議員たちにかなり根回しをして事態収拾に影響を及ぼしているな……と感じながら、議事の進行を見守った。

翌朝の九時、キヨシは何時ものように学生集会の司会席に着き、開会の宣言をした。まず闘争本部とのパイプ役を務める委員が立ち、闘争の全学の現状や本部の方針を伝える。次に、キヨシが事態収拾委員会の報告として、大学側は学生の要求を実質的に受け入れる方向で動き始めたこと、そして闘争の成果を確実に勝ち取るためには、もう少し頑張らなくてはならないことを強調する。様々な質問や意見が次々に出され、その都度担当の委員やキヨシが答えたり、反論したりして時間が過ぎていく。

授業放棄の初期には黙っていた学生たちも、一ケ月を過ぎた頃から活発に手を挙げるようになった。彼らは授業を早く受けたい、理由はともかく授業放棄はもう止めるべきだ……という意見や要望で、医学部が既に闘争を中止したことも強く影響していた。彼は、司会者の立場を逸脱して闘争の継続が必要なことを説得し続けたが、それでも勢いづいた反対意見は収拾がつかない。

「意見は尽きませんが、日も暮れてきました。この辺で決を採りたいと思いますがいかがでしょうか？」

激しい議論に疲れ果てた学生たちに反対する動きはなかった。そこでキヨシは何時ものように「理由はともかく、授業放棄に反対の人は手を挙げて下さい」と呼び掛ける。昨日までは二、三人であったが、数人、いやそれ以上の手がスルスルッと挙がった。彼は立ち上がり、一段と大きな声を張り上げる。

「これから正確な人数を数えますから、そのまま挙げていて下さい」

挙手は、薄暗くなった講堂の両隅に多く、その数は十名を超えている。キヨシは司会の席に着くと、落ち着いた声で宣言した。

「ただ今の採決の結果、反対が一割を超えました。昨夜の委員会で反対が一割を超えた場合には授業放棄を中止することを取り決めています。したがって、今日のこの時をもって薬学部は授業放棄を終了します」

ウォーッと叫び声に近い声がフロアから湧き起った。キヨシはふらつく足取りで教壇を降りかけたが、すぐに気を

取り直して席に戻る。
「ここで提案があります。明日、この会場で薬学部の全体集会を開きましょう。薬学部の学生と教官、この学部に関係するすべての人が一堂に集まり、授業放棄の終結を確認し合う。そして、今回の紛争のしこりを何時までも残すことなく、明るく民主的な学園を作るための全体集会を提案します！」
キョシの提案に異を唱える者は一人もいなかった。薄暗くなった講堂に「早く先生たちに連絡をしなければ」とか「手分けをして電話を掛けよう」という声が飛び交う。すぐに分厚い電話帳が講堂に持ち込まれ、教官の自宅に次々と電話が掛けられていく。それらの光景を放心状態で眺めていたキョシは、その場に委員たちがいないことに気づいた。翌日の準備に忙しい学生たちから離れて、彼は疲れた足で四十日ものあいだ行動を共にしてきた自治会の委員たちを探した。
その委員たちは薄暗い中庭の芝生で円座を組んでいた。彼らは、キョシが近づいて声を掛けても返事もしなければ振り向きもしない。丸まった男女の背中には明らかにキョシに対する拒否の態度が現れていた。キョシは何故の拒否なのか、まったく理解できなかったが明日の準備がある。重い足取りで講堂に戻って教官たちとの連絡状況を確かめた。
翌朝の全体集会では、キョシとゴローさんが代わり代わりに話す展開となった。彼は紛争の初期には前任の学部長と、六月以降は新任のゴローさんと頻繁に会って意見交換をしていたので会議はスムーズに進んだ。改めて学生の要求は実質的に大学側が受け入れる用意があることを学部長が表明し、今後は紛争のしこりを残さずに正常な授業や研究の場に戻すことを確認し合って散会した。
キョシは学部の授業放棄が終結した翌日の夕方に、ふらりと委員会室に立ち寄った。しかし、そこにいた委員たちは敵意をむき出しにして彼を非難する。キョシの独断で闘争が台無しになってしまった……というのである。「それはないだろう！」と反論するキョシに対し委員たちは口を揃えて「反対が一割を超えた場合には闘争のやり方を見直そうと決めたのであって、即刻止めるとは誰も言っていない」と言う。さらに闘争本部とのパイプ役の委員からは、「闘争

の足並みを乱したとして、俺は本部でとことん非難されてきた！」と怒りをぶちまける。

いたたまれなくなったキョシは委員会室を飛び出して学生食堂に向かう。そこで談笑したり囲碁に興じたりしている学生たちに近づくと、彼らは白い目でキョシを見る。何かあったのかと問うと、「君のような過激な学生とはちょっとね、付き合いたくないよ」とあからさまに拒否する。彼はその言葉や態度に居場所を失い、かつては親しかった多くの友からも離れるしかなかった。

キョシが十九歳の春に見出した新しい世界、『人のために』という行動理念はもろくも崩れ去った。

――紛争のような揉め事に巻き込まれた場合には、何が人のためになるのか分からない。一方の人たちには役立っても、逆の立場の人たちには迷惑や害になることがあり得る。いったい何が人のためになるというのか……。

キョシはそれまでの行動理念や行動力の根源を失い、『うつ状態』に陥った。夏休み中は郷里でぼんやり過ごしたが、九月になって学園に戻って来ても元気は取り戻せない。朝、目が覚めても起き上がる気力はなく昼過ぎまで眠り続ける。午後の実習には出席しないと単位が取れないので、三時過ぎに実験室に顔を出して相棒の女子学生に遅刻を詫びる。十分か二十分ほど実験を手伝う振りをして、「済まないけど、後は頼むね」と言い残し、その場を立ち去った。

秋が深まると『うつ状態』はさらに進行して、ひどいときには三日間も起き上がれない。それでも夜になると空腹に耐えられず、重い足を引きずるようにして近くの屋台に向かう。馴染みの店でおでんとお握りを頬張り、空腹を満たしてまた間借りの三畳間で眠った。

廃人のような暗い日々が半年ほど続いたが、彼は必要な単位を何とか取得して四年生に進む。薬学の場合、卒業論文がない代わりに『特別実習』があり、幾つかある研究室のいずれかに所属して実験や研究を手伝う。キョシは迷うことなくゴローさんが率いる『薬化学』を選んだ。

薬化学は、基礎的な有機化学反応を研究する研究室で、理工系の中で薬学が最も得意とする分野である。明治維新で西洋の医学・薬学をいち早く導入しようとした時の政府は、まず、西洋の医薬品を我が国でも作れることを目標にした。具体例として、バイエルのアスピリンは明治三〇年

にドイツで誕生したが、これと同等のアスピリンを合成することは当時の日本では夢のまた夢。現在もよく使われているこの薬剤は、俗に『亀の子』と呼ばれるベンゼン核に二つの側鎖が付いた構造をしているが、アスピリンのような有機化合物の新たな作り方を研究する学問が薬化学である。

その薬化学教室に数人の同級生と共に入ったキョシは大きな実験台を一つ与えられて、自分では何をしているのか分からないままに指示された実験に取り掛かる。相前後して就職活動が始まり、彼は幾つかの候補の中から大阪に本社のあるT製薬を選ぶ。希望の職種はプロパーと呼ばれる営業職で、病院や診療所を訪問して自社の医薬品を宣伝する仕事である。そのプロパーになると進路を決めたのは専門の薬学部に進んで間もない頃で、彼にとって九薬連をはじめ様々な学生活動も『将来に備えての準備』という意味合いもあった。時は高度成長時代の入口で就職は引く手あまた、まして得意とする営業であれば誰にも負けないという自負がある。就職担当の教官が薦めるE社、ゴローさんがお前に向いていると言うS社も断り、「私はT社に行きます」と断言。「お前なー、そんなこと言ったって、お前を採用するかどうかはT社が決めることだよ」とたしなめるゴローさんに「いえ、僕には絶対自信があります」と言い切った。

入社試験は大阪で開かれ、前日と翌日の午前に筆記試験、午後からは面接が行われた。彼は新調したばかりの黒いスーツに身を包み、自信満々で面接会場に入って行く。最初にありきたりのやり取りがあり、それが済むと試験官の一人が昨年の学園紛争を持ち出して彼が果たした役割と思想を尋ねる。その質問にキョシは胸を張って答えたものの、試験官は小首を傾げたまま。そして、「君が言っていることは立派なんだけど、主観性が強すぎて当てにはなりませんねぇ」と冷笑する。その隣の試験官が畳みかけて「情緒不安定の傾向が強いですな、それに支配性や攻撃性も強過ぎる」と矢継ぎ早に欠点を指摘する。すっかり勢いを失い消沈した彼に、中央の白髪の紳士が「君の幸福のために言うんだが、どうも君はサラリーマンには向いていないようだね。サラリーマンにはならない方がいいと思うよ」と静かに言う。

強いショックを受けたキョシは、パチンコ屋で時間を潰した後、寝台車の上段に横たわる。しかし、一睡もできない。

――昨日受けたクレペリン検査のひどい乱れ。かつてはあのようなことはなかった。加えて「サラリーマンにはならないほうがいい」という試験官の言葉……。きっと自分は精神分裂病に違いない……。

その思いは時間が経つにつれて強まるばかりで終点の長崎に着いても、さらに自室に戻ってきても頭の芯にこびりついて離れない。それでも彼は翌週の月曜になると重い足取りで登校し、実験台の前に座って物思いに耽る。そのキヨシを見て、研究室に入ってきたゴローさんが声を掛けた。

「ヨォー、入社試験はどうだった？」

「落ちました」

「だってお前、絶対自信があるって言ってたじゃねぇか」

「どうも、精神分裂症の気があるみたいで……」

「エッ、それじゃお前、サラリーマンにはなれねぇぞ！」

「ええ、面接のときにもそう言われました」

ゴローさんは「フーム」と唸って研究室を出ていく。それから数日のあいだ、キョシは白衣を着て実験台の前に座ってはみるものの何も手につかない。それを見かねたゴローさんの紹介で、彼は大学病院の精神科を受診することにした。爆心地のすぐ上にある付属病院に恐る恐る入って、受付で行く先を尋ねる。迷路のような長い廊下をしばらく進み、指示された部屋のドアをノックすると中年の女性が彼を待ち受けていた。その個室で入社試験のときと同じクレペリン検査や精神・性格検査を再び受け、目の前で検査用紙が開かれる。品の良い女性の医師は検査結果を解析して、それぞれの項目について丁寧な説明をした後で、キョシにやさしく語り掛ける。

「あなたの場合は決して異常ではありません。私は多くの学生さんを診てきましたが、あなたのようなタイプは最初に大きな失敗や、とんでもないことをすることがあるようです。でも、長い目で見れば普通の人より伸びるケースが多いですね。ですから、何も心配することはありませんよ」

彼は病院の玄関を出て、耳に残った医師の言葉を反芻しながら爆心地の広場や平和祈念像の前をしばらく行き来した。しかし、彼の心は大きく揺れたままで心底からの安心

や安堵は得られない。かえって自分が欠点だらけの人間で、サラリーマンとしてまともに生きてゆけるかどうか……という不安が募ってくるばかり。その複雑な思いはそれから何日も続いたが、彼は再び新しい自分に生まれ変わること、実社会で生きていける安定した精神の持ち主になることを決意する。そして、ゴローさんの研究室で過ごす卒業までの日々を、『実社会における仕事』とみなして真剣に取り組む覚悟を固めてゆく。

五、

三月下旬のある午後、キヨシは次兄のカズアキに連れられて日本医大の附属病院に向かった。根津神社の下にミゼット（小型の三輪自動車）を停めて、神社の北口に面した坂道を登る。勾配が一段と急になった道の右脇にコンクリートのビルが立っている。そこが医大の附属病院で、大学病院というより市中の小さな病院を思わせる。二人は質素な玄関を入り、狭い待合室の片隅で付属病院の講師をしている牛山清司（きよじ）医師を待つ。牛山清司とは、キヨシが幼いころから憧れていたキヨジサである。

二月の半ばに、特別実習の実験結果をレポートにまとめ、キヨシは長崎の町を後にした。間借りの三畳間も早々と引き払ったが、彼は郷里には戻らず次兄の家―といっても従業員用に借りたアパート―に身を寄せて薬剤師の国家試験に備える。卒後の進路は製薬企業の営業に決まっていたので、薬剤師の免許は仕事には必要がない。しかし、薬学を出たことの実質的な証明にもなるので周囲に合わせて受験することにした。

受験勉強と並行して、彼はT製薬に提出する書類を揃える。T社については面接で鼻をへし折られ、次の会社を検討しているところに意外にも採用の通知が届いた。そのT社に持参する書類が一通り揃い、後は身元保証人だけに。その保証人を誰にしようかと相談したところ、次兄は医療関係者で親交のあるキヨジサがよいだろうと電話をしてくれたのである。

患者とその家族と思われる人たちの邪魔にならないように隅で待つこと数分。恰幅の良い白衣の医師が笑顔で近づいてきた。背丈はキヨシと殆ど変わらないが、体重は八十

キロを超えているか。幼いとき以来会ったことはなかったが、四角い笑顔には確かな見覚えがある。キョジサは次兄と短い挨拶を交わした後で、キョシの方を向いて用件を切り出す。キョシは大事に抱えてきた角封筒から書類を取り出し、保証人の欄を指さして「ここに記名と捺印をお願いします」と依頼。キョジサは白衣の胸ポケットに刺したペンの一本を執り、大きな楕円形テーブルに書類を広げる。そして、素早くペンを走らせ、「よかったな。頑張れよ」と短い言葉を掛けてそそくさと病棟に戻って行った。

キョシは四月の冒頭に大阪で薬剤師の国家試験を受験し、その翌日にT社の入社式に臨んだ。二百人を超える新入社員が本社のホールに集められ、社長や人事部長、さらに各部門の幹部の話が続く。午後からは三日間の新入社員の合同研修で、それが終わるとキョシたちは数十人のグループに分けられて、プロパ―になるための専門教育に突入。予備知識として生理解剖学や病態生理学を学んだ後で、関連した領域の製品研修が行われる。T社では初めてという専門職としての研修は三ヶ月以上に及んだ。その研修が終わりに近づいた七月の上旬に赴任先の辞令が出て、キョシは仙台に向かう。高台にある独身寮の一室に生活の場を調え、支店に出社すると担当地は「秋田」と告げられた。

プロパーという仕事は複雑で、最初は何をやっているのかよく分からない。ただ、医薬品に関する知識は入社時の研修でみっちり鍛えられ、医師や薬局長に何を訊かれても困ることはなかった。時おりマニアックな医師や薬剤師から難しい質問が投げ掛けられても支店の学術部に電話で問い合わせたり、自分で調べたりして的確な答えをすぐに提供することができた。

その一方で、旅館で寝起きする毎日は、一（はじめ）の章でも触れたように辛くて耐え難いものになった。千秋公園の斜向かいにある大きな旅館には同業者をはじめ、様々な業種の営業マンが入れ代わり立ち代わりに出入りし、キョシの泊まる部屋は夕方にならなければ決まらない。朝、一纏めにしておいた資材も仕事から帰るとバラバラになって別の部屋に移されている。その中で見つからない文献等があっても、自分で失くしたものか、それとも若い女性従業員たちが紛

失したものかは定かではなく、責任の追及もできない。彼は相部屋になった先輩社員に愚痴をこぼすこともできず、黙って唇を噛むしかなかった。

高校生の頃から個室を与えられ、独りだけの時間を大切にしてきたキヨシは、半年も経たないうちにストレスが重なり胃潰瘍を患う。その病が二、三ヶ月で癒えてくると、彼は同じ思いを抱いていた社員と打ち合わせて、新たな定宿を探した。そして、下宿先に近い条件―決まった部屋と文献や営業資材を常時置ける倉庫―が確保できる朝日旅館に活動の拠点を移した。

新たな定宿となった朝日旅館では、角部屋の四畳半がキヨシに当てがわれ、隣接した小部屋に営業資材を置くことが出来た。彼は仕事に必要な書類や好みの書籍に加えてギターなどを持ち込み、自分らしい生活の場を調えてゆく。その新たな住処で少し分かってきた仕事の進め方や自分自身の生き方について、改めて考えるようになっていく。

当時のプロパーは、訪問した病院や診療所と直接商談をして、直(じか)に注文を取ることもできた。今からは想像もできないが、安い納入価格の提示や『添付』と称する現品のおまけを付けること、さらにキャッシュバックまでやりたい放題。しかし、一人のプロパーがカバーできる得意先は少なく、納品や代金の回収を考えると効率は極めて悪い。従って、大手の製薬会社は契約した卸を通して取引を進めたが、キヨシの担当地域にT製薬に協力的な有力卸はなかった。彼が苦労して新製品をある診療所から受注して取引のある卸店に連絡しても、翌月訪問した時にはライバル会社の製品に切り替わっている。毎日、診療所を訪問している卸のセールスの方が遥かに大きな力を持っていたのである。仕事が思うように捗らないことに加えて、生きることへの不安や悩みも尽きることはなかった。一日の仕事を終えて一人になると、キヨシは複雑な人間関係に振り回される毎日が煩わしく、底なし沼に嵌(はま)ったような疲れを感じる。

思い起こせば卒業が間近に迫った一昨年の秋に、彼は再び深い悩みに陥った。そして、その悩みを解決できないまま、後ろ髪を引かれる思いで長崎を後にしてきた。かつて

は何の興味も関心もなかった化学がたまらなく好きになり、研究者になりたいと思い始めたのである。

特別実習が始まった春には教官の指示に従い実験装置を組み立て、言われた薬品をナス型フラスコの溶媒に混ぜる。ガスバーナーで油浴を百二、三十度に熱し、その中で数時間フラスコを回転させた後にカラムクロマトで分離……と忠実に操作する。しかし、数十個もの三角フラスコの底には何もできず、あったとしても数個に黒い汚れが残るだけ。翌週には溶媒や反応温度を変えてみる、さらに加える薬品を変えるなど、いろいろと試みるがすべてが徒労。日に一度はゴローさんがやってきて、あるとき「バカヤロー　てめえやる気あるのかー」と大声で怒鳴る。しかし、キョシは何が悪いのかも分からず、「やる気があるから来ているんですよッ、大学は義務教育じゃありませんからね」と負けずに応酬。踝を返して部屋を出ていくゴローさんの背に向かって、「他の学生とは違って、僕は少々怒鳴られたぐらいではへこたれないよ」と悪態をつく。

その傲慢な態度やプライドも入社試験で粉々に打ち砕かれ、彼は「サラリーマンが務まるように……」と特別実習を卒後の仕事と思って真剣に取り組むようになる。

夏休みが明けると、ゴローさんもキョシの心を汲み取ったかのように特訓を始める。夕方の五時になるとふらりと研究室に現れ、「皆さん、そろそろ御開帳の時間ですよ」と声をかける。即座にキョシたちは実験台を片付けて教授室に集合、賑やかに麻雀が始まる。八時過ぎにゲームが終わるとキョシたちは研究室に戻ってフラスコや分液ロートなどを洗い場のポリバケツに放り込み帰宅した。

翌朝の九時過ぎにゴローさんが研究室にやってくる。そして、キョシの実験台の前に座り自ら実験を始める。それを眺めるキョシに突然、「時計皿！」と声が掛かる。彼は実験台の引き出しを開けて時計皿を取り出して差し出す。続いて「三角フラスコ！」という声に再び引き出しを開けるが、フラスコは一つも入ってはいない。前日の実験で使い尽くして、いまは洗い場のポリバケツの中。「バカヤローてめえやる気あるのかー」とゴローさんが立ち上がり、トレードマークのような雷が落ちてくる。キョシは、「だって先生、昨夜は麻雀に呼ばれて洗う時間なんて……」と言いかけたが喉の奥に飲み込む。

ゴローさんの怒声に何度か晒されるうちに、キヨシは実験の合間に器具洗いをしていては駄目なことに気が付く。そして、その日から麻雀が終わると研究室に舞い戻って洗い場に立った。大きなポリバケツに二杯もある実験器具の洗浄は簡単なことではない。まずフラスコにこびりついた茶褐色の汚れをアルコールやアセトンなどの廃液で拭い取り、次に水と洗剤で洗う。洗剤の白い泡を流し終えた後はもう一度大量の蒸留水で丁寧にすすぎ、水切り棚に並べる。腹や袖がびしょ濡れになった白衣を窓枠に掛けて、彼が自室に帰り着くと夜の十時を過ぎていた。

翌朝は登校を一時間早めて、棚に並んだガラス器具を乾燥器に詰める。三十分後に熱いガラス器具を取り出し、実験台の左右の引き出しに隙間なく詰める。九時過ぎにゴローさんがやって来るが、もう実験器具が揃っていないことで怒鳴られることはなくなった。

時を同じくしてキヨシの実験が凄まじい勢いで進みだした。特別実習に取り掛かって半年経っていたが、週に一個ぐらいのペースで新しい化合物が誕生し始める。

ある日の午後、ゴローさんが研究室に顔を出しキヨシに話し掛けた。

「アミンとの反応は一通り分かったから、今度はカルボン酸との反応……」

「あ、その話でしたら先日助手の……」

「バカヤロー、人の話を終わりまで聞いて答えろー」

久々に雷が落ちてきたが、キヨシは怒鳴るゴローさんを観察する余裕も生まれていた。

「お前ひとりで生きているんじゃねえんだ。人と満足に話もできないで、生きていかれると思っているのか―」と語尾を長引かせて大声を上げているが、それは怒りの感情からではないことが伝わってくる。

特訓が始まって三ケ月ほど経ったある日、ゴローさんがキヨシに指示を出した。

「いま、お前がやっている反応の最初から三番目のシアン化は誰かがやっていたと思うから、調べておくように」

キヨシは「はい」と返事をして、実験の合間に階下の図書室に足を運ぶ。英文の分厚い本を開いて、慣れない英文を目で追ってゆくがそれらしき文献は見つからない。二度、三度と繰り返し調べてみたが結果は同じである。

二日後の夕方、ゴローさんが研究室に顔を出し、キョシに尋ねる。
「このあいだ言った文献、あったか？」
「いえ、ありませんでした」
「本当に、なかったか！」
ゴローさんに念を押されて、キョシは不安になった。そこで、「僕の力で調べた限りでは、ありませんでした」と言い直す。
「ワシは有るかないかを訊いているんだよ！　お前たちは何時も楽をしよう、楽をしようとして、そんな言い方をする」
ゴローさんはそう言い残して研究室を出ていった。キョシは怒鳴られる以上に、「何時も楽をしようとする」という言葉が気に障った。「自分はそんな怠け者ではない」という一心で図書室に駆け込み、再び文献の検索に取り掛かる。今までは飛ばしてきた半世紀も前にまで遡り目を皿にして調べる。図書室に出入りする人は元々少なかったが、周囲に人の気配はまったくしなくなった。それでも彼は一心不乱に分厚い英文の抄録で検索を続ける。そして、それらしき論文のタイトルを見出し、掲載雑誌を探す。その雑誌は天井に届きそうな書棚の三段目。彼は脚立を移動させて、求める一冊を取り出して頁を開く。そこには、ゴローさんが推定したように、今やっているシアン化の反応が掲載されている。その論文のタイトルや著者、概要をメモすると、彼は分厚い本を書棚に戻して図書室の入り口に回る。と、そこには人影もなければ物音もしない真っ白な静けさ。腕時計を見ると十一時を過ぎていた。
翌朝、研究室に顔を出したゴローさんにキョシが威勢よく声を掛ける。
「先生、昨日の文献、ありました！」
「お前、あれから調べたのか」
「はい、九大で三年前にやっていました」
「そうか、そうか」とゴローさんは何度も頷き、「お前、これまでこんなに怒鳴られたことあるか？」と訊いてくる。そして、「お前たちは優しい言葉で言っても聞きはしない。だからワシは分かるまで……と思っているんだよ」と暖かい空気をそこに残して、研究室を出ていった。
ゴローさんの雷は他の研究室に移ったが、キョシの実験

の勢いは衰えない。春先には出来なかった反応も、いまは面白いように進む。自然科学では人の世界と違って嘘や誤魔化しは通用しない。恐らく、実験器具の洗浄や乾燥に問題があったに違いない。数時間、時には丸一日も熱い油浴で反応させた黒いタールから様々な器具を用いて精製していくと、小さなフラスコの底に結晶が生まれてくる。ある時は純白、ある時は淡黄色の美しい結晶があたかも荒れ野に咲く花のように。

目や耳では捉えられない自然界の奥底に流れる原理や法則。それを推測して実験を組み、推測が正しかった時には結晶として新しい化合物が生まれてくる。そして、その実験が世界中で誰もやっていない場合には新たな発見や発明に繋がる。今まで、キヨシにとって化学とは原子数や亀の子の形と名称などを暗記するだけの詰まらないものに過ぎなかった。しかし、実際に化学の一端を齧(かじ)ってみると、それは宝物を求めて荒野に踏み込むような挑戦であり、この上もなく崇高な行為のようにも思えてくる。

その彼に、同室の指導教官が「キヨシは研究者に向いている、お前は研究者になるべきだ」と言い出した。そして、進行中の実験をコンクリートの床にチョークで書き込み、これからの展開を説明する。少し内容が分かってきたキヨシも自分の考えを差し挟んで、実験の進め方について延々と議論が続く。朝早くから夜遅くまでそのような生活をしていると、次第に彼は化学者になることも悪くはないな……と思えてくる。就職が決まっているT社を断り、大学院に進む。目の前に迫った来年度の受験は無理なので、一年間の大学院浪人を……と話は止め処もなく膨らんでいく。憧れる化学者への道を夢見て、彼はさらに実験に打ち込み、間借りに帰っても英文やドイツ語の論文の読解に力を注いだ。

しかし一夜明けた朝になると、彼は、現実に引き戻される。経済的な裏付け、入社を約束したT社に対する裏切り、さらに浪人しても大学院に入れるかどうか……と幾つものことに確証が持てない。そして、あらぬ夢を捨てて現実に立ち戻るように……と己に言い聞かせながら重い足で登校。しかし、実験や議論が始まってしまうと化学の世界に魅了されて再び叶わぬ夢を見続ける毎日。

瞬く間に年が明け、一月も終わりに差し掛かった。彼はゴローさんや指導教官に「もう先には進まないで片付けに入るように」と言い渡される。しかし、キヨシの手は思うように動かず、実験台の前で物思いに耽る。

――この上もなく好きで愛おしくさえ感じる研究室をもうすぐ出て、未知の世界に旅立たなければならない。これからは様々な人を相手にする営業の世界で暮らしていくことになるが、きっと迷ったり悩んだりことが多いに違いない。その混沌とした生活の中で、研究に取り付かれてしまった自分はいったい何をテーマに生きてゆくのか？

そのような自問を繰り返すうちに、キヨシは、恐らく『己』をテーマに生きること、自分をモルモットに見立てて「人とは何か、いかに生きるか」という実験を繰り返していくことになるに違いない……。思い起こせば、大学を長崎の地に選んだことも、特別実習を仕事と見做して取り組んだことも、元をただせばそのような流れの中でやってきたこと。これからも同じ挑戦を続けることになるが、そのプロセスで行き詰ったときにはどうするのか？　何としても超えられない壁に突き当たってしまった時には？　と思い悩んだキヨシは、今ならいくらでも手に入る青酸カリを少しだけ隠し持って卒業しようか……と何度も考えた。しかし、その都度、強い反論が腹の底から湧き上がってくる。

――バカな！　どんなことがあっても自ら命を絶つようなことをしていけない。いくら苦しくたって歯を食いしばって生きていく……。

そう心に誓って、研究室も生活の場もすべて引き払い長崎を後にしてきた。

いま、長崎を発った時の心配や懸念は現実のものとなり、朝起きても気分がすぐれない。仕事は努力をしても思うに任せず、客扱いの荒い旅館の煩わしさに定宿を変えてみたものの、今度は孤独に悩まされる日々。加えて着任してすぐに知り合った年上のホステス、先輩に連れられて入った店の女との別れ話も心に突き刺さってくる。彼は、その女と情交を結んで以来、仕事や旅館暮らしの苦しみを紛らわすためにズルズルと淫らな関係を続けていた。しかし、一年以上も付き合っているうちに、相手はキヨシとの結婚を本気で望むようになってきた。彼女の心を察知したキヨシ

は、「結婚なんてとんでもない。君が好きだと言うから付き合ってやっただけじゃないか」と冷たく突き放す。深夜喫茶で半狂乱になって泣き叫ぶ女を尻目に離別してきたが、果たしてそれは人として許されることであろうか？　一時は、人のために尽くすことを生き甲斐にしてきた自分の生き方に明らかに反する……。

そのような悩みや苦しみが重なっても、彼には打ち明けられる相手はどこにもいないし、相談する友も一人としていない。次第に疲れが溜まりに溜まって、再びキョシは朝に目覚めても一日中起き上がれない泥沼に落ち込んだ。

秋田に着任して二年と少し経ったとき、キョシに転機が訪れた。秋の定期異動で、担当が秋田県の中心部から南部に変わったのである。これまでは診療所が中心であったが、これからは『かまくら』で知られる横手市を中心とした地域の大病院から診療所まで、すべての医療機関を担当することになる。キョシは朝日旅館の荷物を新たな定宿である小笹旅館に移して、やはり下宿のように決まった部屋を要望する。運がよく帳場の上の八畳間が空いていた。いまは古びて客を泊めていないというその部屋に落ち着くと、彼は新人として着任した時とはまったく違うスタンスで仕事に取り掛かった。

彼が新たな担当地域で試みたことは、「営業を科学する」という取り組みである。前任者からの簡単な引継ぎの後で、彼は担当先を一通り概観するように回ってみた。担当地域には七、八軒の病院と三百軒を超える診療所がある。それらのすべてを一人で訪問することは端から無理な話である。そこで、彼はどのように訪問を組み立てたら実績が上がるか、卸との連携はどのように進めたらうまくいくのかを考えた。

まず、昼のゴールデンタイムには大きな病院を定期的に訪問して、自らの手で自社品の育成を進める。彼は、『一年間で担当先の実績を倍増』を目標に、内科、外科、小児科など、院内にあるすべての科の医師に面談して宣伝を展開。昼に会えなかった医師には夕方に再び訪問して面談を試みる。

一方、診療所については午後の余裕のある時間帯に二、三軒回るのが限度であり、それでは思うような実績アップ

は望めない。そこで、「どうしたら診療所の実績を伸ばせるか」がキヨシの新たな研究テーマになってくる。

彼はまず、自社品の納入実績が多い順に得意先を便箋に羅列してみた。そして上位一割の得意先の合計が担当地域全体の実績に占める割合を電卓で計算してみると六割を超える。さらに、上位の二割の診療所では八割を超えることを見出す。彼の担当エリアには診療所が三百軒もあるが、実績の大半を形成しているのは上位の一割か二割の先に過ぎず、診療所については五、六十軒をしっかり管理すれば十分であるという結論に達する。

その五、六十軒をどの診療所にするかというターゲティングについては、卸のセールスたちと共同作業で進めた。まず、患者が多く、しかも過大なサービスを要求されない先を選び、納入品目は卸のトップメーカーと競合しない品目で、セールスに過大な負担がかからないように一人一軒か多くても二軒以内に設定。出来上がったターゲット先を模造紙に列記して、月に一度の販売促進会議で進捗状況をセールスたちと話し合う。その結果、メーカーが早急に訪問して、もう一押しすれば納品につながる先が判明してくる等々、キヨシの仕事は以前とは比べられないほど効率が良くなっていく。

さらに卸の幹部、とくに店長や営業所長に対してもメリットがなければ積極的な協力は得られない。彼は基礎医学や薬学の専門知識を活かして、セールスたちへの教育係を積極的に買って出る。高血圧と脳卒中、胃炎と胃潰瘍、呼吸器と喘息などのテーマについて、彼はセールスたちが営業に出かける前や訪問先から戻ってきた夕方に、分かりやすい教材を用いた勉強会を何度も実施した。

時期を同じくして、医薬品の販売管理にコンピューターを導入する動きが業界に起こっていた。後れを取ってはならないと、T社においても市場環境が適している東北地方をモデルケースに、試行的作業が始められる。仙台支店の一角に大型コンピューターが持ち込まれ、協力が得られる卸から入手した売上伝票の一枚一枚をインプット。病院や診療所の個々の実績が毎月集計されるようになってくる。それまでの『卸への送品量』を月々の売上とし、納入先についてはよく分からないというどんぶり勘定の時代から大きく変貌しようとしていた。キヨシは、試行的作業を推進

している業務課長やコンピューターのプログラマーと情報をやり取りするうちに彼らと親しくなり、作業のいろいろな場でアドバイスを求められるようにもなってきた。
十数軒もある卸から自社の売上伝票をすべて集め、コンピューターに入力する作業は想像を絶するほど手間が掛る。その作業手順の作成や卸との折衝に執念を燃やす業務課長に、キョシは月初に三、四日だけ出社する内勤の合間に声を掛ける。
「課長、ちょっといいですか。先月、個人別、販路別の実績表がもうすぐに……と仰っていましたが、出来ました？」
「ウム」と小さく頷き、課長は間髪を入れずに机の脇にあった一枚を差し出す。
「凄い！　僕の先月の売上が一目瞭然ですね。しかも、病院、中小病院、診療所と販路別に集計されている」
「凄いだろう、君にもいろいろと協力して貰ったけどね」
「でも課長、これは売り上げの一部でしょう？」
「いや、全売り上げの九割以上はカバーしているよ」
「へー、そんなに進んでいるのですか！　ところで、この資料、貰ってもいいですか？」
「ああ、いいよ。君のデータは支店の代表事例としてよく使わせて貰っているからな」
彼は、業務課長から譲り受けた最新の資料を胸に抱くようにして、一階上の自席に戻った。

キョシの仕事が軌道に乗り、目覚ましい勢いで実績が上がっていた春のことである。五月のゴールデンウィークに入ると、彼は仕事から離れて東京に向かう。都内には数人の兄弟がいるが、彼は千駄木の団子坂で工業用ブラシの製造販売業を『文京ブラシ』という商号で営む姉夫婦の家に寄宿する。文京ブラシを設立した義兄は商才に長けた人物で、昔ながらの刷毛やブラシに見切りをつけ、家電や各種機械類のネームプレートを研磨する工業用ブラシの製造に仕事を切り替える。そして、関東とその周辺地域の工場に幅広く納入し、定期的に円筒形の台木に植えたブラシを交換するビジネスで高い収益を上げていた。
義兄は狭い敷地に五階建ての『文京ビル』を建て、地下一階を工場と事務所に使用、四階から上を住居に充てて残りはテナントとして喫茶店や美容院に貸している。エレベ

ーターはなく、螺旋状の狭い階段を昇った四階は、兄弟や従兄のキヨジサたち親族のサロンか集会所の趣があり、夕方になると必ずと言っていいほど誰かが寄り集まってくる。キヨシが文京ビルの狭い階段を昇り、姉夫婦に会うのは正月以来であるが、そこで彼は、「キヨジサが留学から戻ってきた」という話を聞かされる。事情に詳しい姉の話では、二年前から米国に留学していたが、今年になって主任教授の木村栄一先生がたまたま留学先を訪問したところ八十キロもあった巨体は見る影もなく痩せている。本人は研究に夢中で気付いてはいなかったが、悪性の病気を推測した木村教授がその場で帰国を命じ、三月に戻ってきたのだという。

その話を聞いた翌日の午後、キヨシは鴎外記念図書館のある小径を根津神社の方に数分歩いて、医大病院にキヨジサを見舞った。

ナースセンターで教えられた個室のドアをノックすると大きな声が返ってくる。しかし、ドアを開けると、ベッドに座っていたのは枯れ木のように痩せ細ったキヨジサで、以前は福々しかった頬もげっそり削げ落ちている。

「お久しぶりです」と声を掛けながら、キヨシは勧められた椅子に座る。

「アメリカで放射線を浴び過ぎてね、白血球が少し減ってしまった」

それが、久々に会ったキヨジサが発した最初の言葉であった。帰国後は木村内科の病室で療養をしながら学生の講義、患者の診療、臨床研究と忙しく働いているのだという。その口ぶりから、キヨジサは自分が悪性の貧血を患っている……と思い込んでいるように聞こえる。姉からは末期の胃癌と聞かされていたキヨシは、話す言葉に細心の注意を払いながら、「あまり無理をされないように……」と言うのが精一杯である。

「ところで、キヨシはすごい成績を上げているんだって」

「えっ、なんで分かるんですか？」

「このあいだ、T製薬のプロパーを呼んで調べたんだよ。仙台に従弟がいるから、どんな様子かってね。そしたら抜群の成績だって言うじゃないか」

「いえ、大したことはないです。秋田県の田舎で、競争相手が殆どいないような担当地域でのことですから」

「いやいや支店で一番になるのは簡単ではないよ。身元保証人になったワシとしても鼻が高いからな」
「有難うございます。そう言っていただければ僕も嬉しいです」
思い掛けない話が出て、キョシは少し明るい気分を取り戻した。営業は孤独との戦いであると常々感じていたが、何処かで誰かが見ているのだなあ……と感心しながらキョジサの病室を出た。
キョジサは昭和四十五（一九七〇）年の三月にアメリカのハーネマン医科大学の循環器部門に留学して狭心症や心筋梗塞の臨床研究に従事している。主に『心臓カテーテル法』を研究しているが、具体的には太腿の付け根から太い管（カテーテル）を挿入し、管の先端を心臓や心臓の上に冠のように被さる冠動脈に差し込んで造影剤を注入、心臓全体の動きや冠動脈の病変をX線で映し出して心臓病の診断や治療に役立てる。
それまでの心臓病学では患者が苦しんでいても、体の中で何が起こっているかは殆ど分からず、強心剤や鎮静薬を投与して経過を観察していた。しかし、カテーテルを心臓の中まで刺し込んで、患者の心臓の形や動きをリアルタイムに観察することで、今まで分からなかったことが次々に解明されてくる。そして、半世紀近く経った今日では狭心症や心筋梗塞の治療は飛躍的な進歩を遂げ、多くの患者さんに福音をもたらしているが、その草分け的な仕事をキョジサは研究していた。
キョジサが渡米する前にも、キョシは文京ブラシで何度か彼に会ったことがある。会ったといっても来客で賑わうリビングでの話であるが、キョジサはよく医学生の出来の悪さをぼやいた。医師の国家試験を何度受験しても合格しない医学生に、「今まで読んだ本を挙げなさい」と尋ねると、「漫画以外に読んだ本はない」と答えるという。一冊の本すら読んだことがない学生を相手に、幾ら熱心に教えたところで良い結果が得られるわけはない……と嘆く。
時折、話が専門領域の話に及ぶと、心臓病や狭心症に効く薬は殆どない、あるとすればニトログリセリンとＫＣＬ（カリウム製剤）ぐらいであると言い切る。当時は冠拡張剤が全盛の時代で、心臓に酸素や栄養を供給する冠動脈を拡げる薬が狭心症の第一選択薬になっていた。ドイツを中心

にしたヨーロッパの流れを踏襲したもので、日本中の津々浦々でいろいろな種類の冠拡張剤が処方されていた。その主流となっていた治療法に対して自信たっぷりに「冠拡張剤は効かない」と断言。キョシはその冠拡張剤を販売する側に身を置いていたので、俄かには賛同できずに聞き流していた。しかし、それから数年が経過すると、医学界の評価はコペルニクス的に変わる。キョジサが予言したかのように、「冠拡張剤は無効であり、時と場合によっては逆効果になる」とまで言われるようになっていく。

次にキョジサに会ったのは、杉並区の高円寺に住んでいた次兄カズアキの葬儀の時である。次兄は、十月に脳出血で倒れて医療機関に救急搬送されたが、治療を施す間もなく息を引き取った。元々腎臓が悪くて医師から無理をしないようにと勧告されていたが、その勧告を無視して休む間もなく働いた。昼間はクリーニング工場で動き、それが終わると都内に十軒ほどあった取次店を回って洗濯物の集配。十数人もいた店員への指示や絶え間なく起こる欠員の穴埋めと新規の募集。さらに、妻が親の看病で里帰りをしていたため、家事のすべてと二人の子供の世話……。一日にわずか三、四時間しか眠れない生活が長いこと続き、体はボロボロになっていた。

急逝した次兄の葬式が一通り終わり、菩提寺の境内に親族や知人が集まってくる。実家の親の死を看取ったばかりの妻が慌てふためいて輪に入ってくるが、幼い子供を二人抱えて狼狽(うろた)えるばかり。とても喪主としての挨拶ができるような状況ではなかった。キョシたち兄弟は首を突き合わせて協議し、年長のキョジサに喪主と親族代表の挨拶を頼み込む。快く引き受けたキョジサは、ぐるりと輪になった会葬者に向かって静かな口調で話し始めた。しかし、キョシの注意は挨拶の中身より、キョジサの体調に向けられた。話す声は張りがあってよく通るが背筋を伸ばした身体は心もとなく、春に会った時よりさらに痩せている。「骨と皮」という表現があるが、まさに頭蓋骨や顎の骨が透けて見えるほどである。

しかし、キョジサは淀みなく話した後で、幼い遺児たちの今後を見守って欲しいと結び、会葬御礼の挨拶が終わっ

た。キヨシは姉夫婦と共にキヨジサに駆け寄り、深く頭を下げてお礼を言う。ほかの兄弟は取り乱した義姉と遺児たちを取り囲み、葬儀後の段取りを協議し始める。そのグループが姉夫婦にも話に加わるようにと声を掛けてきた。キヨシはキヨジサを一時も早く病院に帰した方が良いと考え、「タクシーを拾ってくるよ」と言いながら駆け出す。彼は通りで拾った一台を山門の前に停めて、キヨジサを後部座席に誘う。そして、「僕が医大までお送りします」と周囲に言い残して、キヨジサの隣に腰を沈めた。

菩提寺を出たタクシーは蚕糸試験所の角を右折して、青梅街道を新宿方面に進む。キヨシは改めて先ほどの挨拶のお礼を言い、四十三歳で急死した兄は仕事中毒としか言いようがなく、主治医をはじめ誰の忠告も聞かなかったことを話す。キヨジサは、「戦争中に育った僕らの世代はみんな同じだよ、必死で働くほかには生き方を知らないからな」と自嘲気味に言う。それらの話題が途切れたとき、キヨシは気に掛かっていたことを切り出した。

「ところで丸山ワクチンを作った先生も確か、日医大ですよね？」

「そう、丸山千里（ちさと）と言って、うちの皮膚科の教授。僕が渡米する前に定年退職になったんだが、今年になって『ワクチン療法研究所』というものがキャンパス内に創設されてね、その初代の所長に就任しているよ」

「その丸山先生も、茅野市の出身と聞いたことがありますけど？」

「いや、茅野と言うより金沢だよ。彼の生家はうちの斜向かいにあった」

「斜向かいというと、上町の方に？」

「そう、下（しも）問屋から細い道を挟んで四軒ぐらい上（かみ）の方だった」

「そうすると、今は床屋と美容院がある辺りかな？」

「いや、今のことはまったく分からんよ。長いこと郷里には帰っていないからなぁ」

「そうですか、床屋と美容院というのは僕の中学校の同級生の店なんですが、丸山千里先生も金沢出身だったんですね」

タクシーは新宿駅の手前に差し掛かり、渋滞がひどくなってくる。ノロノロと断続的にしか進まない車内に、しばらく沈黙が続いた。キョシはその重苦しさに耐えきれず、幼い頃から気に掛っていたことを口に出す。

「こんなことをお聞きしてはいけないと思うんですが……」

「何だよ、遠慮しないで言ってみな」

「はい。遠い昔のことですが、キョジサが結婚された時の花嫁さん、奇麗でしたね」

「ああ、そんなことか……」

「今でも花嫁さんの凛とした美しさが、鮮明に焼き付いています」

「ウーム、そういえば彼女は最期まで一度も弱音を吐かなかったな……」

キョジサは両腕を組み、骨が浮き出した顎を少し上げて目を瞑る。

「彼女とお知り合いになったのは、病院ですか？」

「そう、結核の入院患者だった」

「当時は不治の病と言われていましたが、治る見込みがあったんでしょう？」

「ウム、結果は駄目だったんだが……。とにかく彼女の生きたいという気持ち、再び舞台に立ちたいという願望がとても強かった。その彼女に、僕は寄り添ってやりたかったということかな……」

キョシはそれ以上、若くしてこの世を去った花嫁のことは聞けなかった。彼女はＳＫＤ(松竹歌劇団)の踊り子で、浅草の文具店の娘に生まれた。商家の子女らしい明るさや人懐っこさに加えて、人並み外れた美貌と容姿の持ち主。キョジサは入院してきた彼女に一目惚れ、さらに彼女の純な人間性にも打たれて求婚する。もちろん、牛山家の親族は猛反対。花嫁の親族もまた、長くは生きられないであろう娘との結婚に素直に賛成はできない。しかし、キョジサは心に決めた花嫁を妻として迎え入れた。彼女の病状が好転するときを見計らい、郷里で盛大な披露宴を催す。そして、夫として、主治医として余命幾ばくもない妻との愛を紡ぎ、日々衰弱していく妻の最期を看取った。

今から二十年近くも前のことであるが、キョシはあの時の婚礼が単なるお祝いの宴ではなかったこと、迫りくる死を見据えた儀式であったことを改めて思い知らされた。こ

の世に生まれ、好きな踊りに熱中し、そのさなかに見舞われた不治の病と愛する夫との出遭いと結びつき。花嫁にとってそれは真っ暗な夜空を赤く染める花火の煌めきにも似た一瞬であったに違いない。その喜びと悲しみ、幸せと不幸せ、希望と迫りくる死の恐怖、それらのすべてが綯い交ぜになって、この世のものとは思えないほどの美しさと凛々しい姿を醸し出していたに違いない。

キョジサは次兄の葬儀があった翌年の昭和四十八年（一九七三）八月六日に不帰の人となった。キョシの次兄カズアキの葬儀で親族代表の挨拶をした十月に、それまでの講師から助教授に昇進。翌年八月、逝去後に教授に昇進している。

彼が米国留学から帰国後、日本医科大学の医師団が徹底的に検査したものの、結論は手術もできないほど進行した胃癌。それでも本人には末期癌であることを告知せず、キョジサは健康人と同じように学生の講義、診療、そして研究に従事。逝去直前の三月には、日本循環器病学会のパネルディスカッション『冠動脈の外科』で内科側の代表として発表する等々の活躍をしていたが、こころざし半ばでその波乱に満ちた四十六年の生涯を閉じた。

六、

大学を出たときは「サラリーマンになれるか」、さらに「プロパーが務まるかどうか」という不安と苦しみに苛まれてのスタートであったが、キョシは優れた営業成績を背景に、己に自信と誇りを持って生きられるようになった。担当地域も五年後の秋に異動があり、仙台市内の大学病院とその関連施設を担当。月の大半を旅館で寝起きするというアブノーマルな生活からも解放される。

彼を取り巻く環境が大きく変わった直後に、また故郷の宿場町を思い起こさせる出来事が待ち受けていた。都内で畳屋を営む叔父のショウキチが、仕事で近くまでやって来た折に電話を掛けてきたのである。

「お前のお袋が生まれた家がよォ、仙台のすく近くにあるというのに、どうしてキョシは行かねえんだよーッ」

職人気質の叔父が口を尖らせ、大声で言う。しかし、キ

ヨシはその言葉を素直に受け入れることはできなかった。何故なら、キヨシにとって『母はないもの、自分の中からきれいさっぱり消し去ったもの』であったから。陰湿な自分を忌み嫌った彼は、高校を卒業すると遠く離れたところに行って生まれ変わろうとした。当然、母と幼時に死別したことやそれに伴う悲しい出来事も忘れる……と固く心に決めている。しかし、叔父からたびたび電話が掛かってくると、キヨシの心は揺れた。

――確かに母のことは「望まないし、考えもしない」と心に決めてきたが、それは頑なな心から発するもの。いま、自分が一人前に成長したというのであれば、過去の弱い自分とは違った対応もあり得るのでは……。

そう考えたキヨシは、次に叔父からの連絡が入ったとき、母の生家に行くことに同意する。そして晩秋の土曜日に、彼は叔父を助手席に乗せて市街地を出た。車は稲刈りが済んだ田圃の中を真直ぐに進み、仙台空港のすぐ脇を通り抜ける。さらに三、四十分走ると阿武隈川に差し掛かり、長い橋を渡ったところで左折。堤防の上を海に向かって数百メートル進む。

「キヨシよぉー、右に見える鳥居が水神さまだ。その先を右に入ったところが、お前のお袋が生まれた家だよ」

彼は神社の先にある小道に入り、堤防からの坂道をゆっくり降る。真直ぐな道の左右に数軒の家が立ち並び、左手に小さなガソリンスタンドがあった。

「キヨシ、そこのガソリンスタンドに車を入れて」

「停めてもいいんですか？」

「ああ、持ち主とは長い付き合いだからよォ、心配することねぇ」

そう言われて、彼はコンクリートの壁で囲まれたスタンドの隅に車を停める。そのスタンドの手前にある二階建てが母の生家で、民宿のように細長い。叔父のショーキチは、家とコンクリート壁に挟まれた細い通路を奥に進み、突き当たりにある玄関の戸を開ける。笑顔で出迎えた嫁に促されて居間に入ると季節より少し早目の炬燵があって、そこに年老いた伯母が座っていた。伯母はキヨシの来訪を喜び嬉しそうに話すが、訛りの強い方言のため詳しい内容は殆ど理解できない。しばらく話すうちに伯母の長男タダシが帰ってきて、炬燵に足を入れる。彼は近くにある漁協の事

務所に勤めていて、妻からの電話で早引きをしてきたという。

「キヨシ、よく来てくれた！　お前の兄弟にはよぅ、怪我をしたとき助けて貰った」

深々と頭を下げながら四十過ぎのタダシが言う。数年前、漁船に乗っていたときに大怪我をして手術をしたが、その際に新鮮血が必要になり、キヨシの兄たちが駆けつけてきて献血。その怪我を契機に、仕事を事務所勤めに変えたのだと話す。

台所に籠っていたタダシの妻が、「腹子飯（はらこめし）が出来たよ」と丼を運んでくる。すぐ近くの漁港に揚がった鮭とその腹から採ったイクラとを炊き合わせた郷土料理で、今が旬らしい。

「この腹子飯の米もよぉ、今年採れたばかりの新米だよ」

タダシは自慢げに言いながら、出来立ての料理をキヨシたちに勧める。さらに「鳥の海」という内海で採れた生海苔やカレイの煮付などが炬燵の上に隙間なく並ぶ。それらに箸を付けながら、キヨシはふと小二のときに書いた作文のことを思い出した。あのときの「せんだい」とは亘理町の荒浜であり、「ヒラメの干物」も恐らく小さなカレイであったに違いない。しかし、そのようなことはさて措いて、母が生まれ育った家は漁港や内海のすぐ近くにあり、今も昔も海の幸・山の幸に恵まれた地のようである。

「妹のヒサシが信州に行ったのは、確か十三か四か……。母に連れられて行ったまま帰ってくることはなかったさ」

伯母が聞き取りにくい方言でぼそぼそと言う。ヒサシの次には弟のミノル、さらにショーキチが母に連れられて上京、それぞれ洗濯屋や畳屋に弟子入りをしてやがて自立。婿取りをして家業を継いだ伯母は、いつ弟妹が帰って来ても困らないようにと古い家を守ってきたのだと淡々と話した。

その時を契機にキヨシは荒浜の家によく出入りしたが、伯母の母―キヨシにとって祖母―は家にじっとしていられない人で、家業は夫に任せて頻繁に東京やその周辺に出掛けていた。やがて彼女は、製糸業が盛んな信州で女工を求めていることを知り、宮城県の南部や福島県の少女たちを集めて汽車に乗せる。そして、信州諏訪の製糸工場に送り

込むようになってゆく。
当時の女工は高給取りで、腕の良い糸取りは二、三年で家が建つというほど厚遇された。しかし、腕の悪い女工は冷遇され、腕が良くても結核やペストなどに罹り、郷里に送り返されたり命を落としたりする女も少なくはなかった。当然、キヨシの祖母が連れて行った少女の中にも不幸な顛末をたどる者もいて、祖母を快くは思わない隣人も増えてくる。そのような折に尋常小学校を卒業したヒサシを、祖母は近郊の少女たちと一緒に信州に連れて行く。
当時の製糸業と言えば岡谷が世界的に有名であるが、諏訪湖の周辺や岡谷から十数キロも離れた金沢村にまで工場は広がっていた。本陣問屋の跡屋敷に住む牛山家が経営する『マルキョー器械製糸』もその一つで、昭和の初期には百釜を超える工場に百六十人もの女工が働いていた。彼女らは福島県の出身者が多く、給金が高いことに加えて横浜への慰安旅行がある等、当時としては考えられないほどの待遇を受けていた。そのマルキョーに職を得たヒサシは手先が器用で、すぐに最高級の絹糸が採れる女工になってゆく。
三、四年後に彼女は工場から牛山家の奥女中に仕事が変わり、嫁入り修行を兼ねた家事に専念する。その配置転換からしばらくして、キヨシの父、トシオの妻が三歳の長女と生後九か月の長男を残して急死する。幼子を二人抱えた弟に救いの手を差し伸べたのは、牛山家に嫁いだトシオの姉ヨシエであった。彼女は奥女中であったヒサシを弟の家に派遣し、しばらくして嫁入りをさせる。そして二人のあいだにカズアキが生まれ、末っ子のキヨシに至るまで大勢の子供が次々に誕生することになる。
キヨシは、自分の母が後妻であったことを知ったのは高校生になってからである。父にとって二番目の妻であったヒサシもまた、幼いキヨシたちを残したまま三九歳でこの世を去った。死因は、虫垂炎をこじらせた末の腹膜炎。母に関するキヨシのわずかな記憶は、母の高熱を下げるために裏庭の池に張った分厚い氷を兄たちがツルハシで砕いている光景。それに布団から起き上がり手洗いに向かうのであろうか、寝巻の後姿、それも幼児の目に入る腰から下だけが遠ざかってゆく灰色の残像だけである。
再度、妻を失った父のトシオは悲嘆に暮れ、もう二度と

結婚はしない、そして残された子供たちを別け隔てなく育てようと決意。二人の母の何れかが写っている写真をすべてアルバムから剥がして焼却した。したがって、キヨシは亡くなった母の写真を一枚も見たことがなかった。

歳月は流れ、今はスカイツリーで隅田公園とその周辺が脚光を浴びるようになった。キヨシはあるとき、隅田公園の設計図が残されていることをインターネットのウェブサイトで知った。その設計図を直に閲覧するために、彼は四谷にある土木図書館を訪ねた。受付で申請した冊子を受け取り、閲覧室にそれを持ち込む。そして、二十数枚の写真、もちろんモノクロの色褪せた写真を丁寧に調べたが、作者を推定できるものは何も見いだせない。インターネットに掲載されているように「作者不詳」のままで、図書館の職員に尋ねても調べる手掛かりさえ掴めないと言う。

いま、甲州街道金沢宿のかつての街並みを探すことはむずかしい。緩やかに傾斜した国道の『くの字』に曲がった交差点は、昔からそこには何もなかったかのようにさびれ、ただ夥しい車が通り過ぎて行くだけである。もちろん、キヨシの脳裏に焼き付いている本陣の社も、伯母が嫁いだ本陣問屋の旧い屋敷も姿を消した。そして、その旧家の次男に生まれ、医大に進み心臓病の研究に携わったものの、こころざし半ばで逝去したキヨジサ、この家の支援を得て工業高校に進学、震災直後の東京、長崎の雲仙、さらに中国大陸へと仕事の場を広げ、山口でこの世を去ったヒデサ、この旧家が経営する製糸工場に職を得たのち、父トシオに嫁ぎキヨシの母となったヒサシ……。

信玄がこの地を支配する前から交通の要所として栄え、その後三百数十年にわたって多くの人や荷物の集積と取次を担ってきた宿場町。その中核となる本陣問屋の跡屋敷とその屋敷にゆかりが深い人々の足跡。それらはいま、何一つ残ってはいないし、彼らの生涯を知る者もほとんどいなくなった。キヨシも彼らの生き様を知る一人ではあるが、もはや老境に差し掛かり、これ以上の史実を掘り下げることも叶わない。そして、数百年ものあいだ栄えた宿場町がその姿を跡形もなく消してゆくように、そこに生まれ育ち、懸命に生きた人々の記憶も途絶えようとしている。

〈了〉

【編集後記】

■例年より早く紫陽花の見ごろを迎えたが、文芸「草の丘」も六月末を待たずに十四号を発行する運びとなった。今回は新たに「紀行文」と「書評」の投稿があり、詩や短編小説等と合わせて七作品の構成である。

■表紙の風景は、県立「花の丘公園」のゲートを入って少し進んだ高みからの眺望である。舗装された道をゆっくり下ると大きな池に差し掛かり、悠々と泳ぐ鯉を右に見ながら楔形の岸辺を辿ると奥隅に僅かばかりの蓮の花。豊かな緑と水辺に恵まれたこの地のイメージを、目次の下にも表現してみた。

■冒頭の詩は、タイトルから刺激的なハッカの匂いが漂ってくるが、メントールには食品や医薬品に限らず、文学の世界においても気持ちを奮い立たせる効果があるのかも知れない。新鮮な発見である。

■畑中康郎の「反論」は、企業におけるパワハラの世界をうまく描いているが、御岳山の噴火を思わせる場面はインパクトが強すぎて、作品本来のテーマが薄れてしまったのでは……。

唐瀬　光の「廃村紀行」は、我が国の至る所で見られる現実の姿で、リアルな表現には身につまされるものがある。それ以降の掲載作も、過去と現在とを対比させて、「生きることの危うさ」や「人の世の無常」を描いたものが多い。「暗い」という感も否めないが、文学にとっては極めて重要なテーマであり、更なる精進を期待したい。

〈香取　記〉

【会員と連絡先】

いんば　華子　bach.goldberg-variationen@hotmail.com

唐瀬　光　effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp

中川　とら　nakagawatora1@gmail.com

畑中　康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

香取　淳　katorijun27@gmail.com

高橋より（イラスト）

junko328p@softbank.ne.jp

草の丘　第十四号

発行　二〇一八年　六月十七日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳

連絡先メール　katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ　http://bungeikusano-oka.raindrop.jp